漂流

作　夏之始

ボスポラス大橋の現場で

ヘリコプターのローターがまき散らす砂埃の向こうから、エルドアン大統領が悠然と現れた。ここは、イスタンブールのボスポラス海峡を跨ぐボスポラス大橋の建設現場である。最後の橋げたが吊り上げられ、イスタンブールにおいてヨーロッパとアジアが大吊橋で繋がる記念日に、大統領が首相、運輸大臣を引き連れて、トルコの力を世界に誇示するためにアンカラからわざわざ来たのだ。

神野健二は、出迎える数百人のヘルメットの合間から、自らのこのプロジェクトに対する誇りもこめて、

「やっと、ここまでたどり着きましたな」

隣の三島喜朗に囁きかけた。
「そうだな。いろいろなことがあったから感慨深いよ。でも今日は、大統領の前ではトルコ人が主役で、我々は裏方みたいなもんだからな」
三島は笑いながら神野を見た。
エルドアン大統領にとって、トルコを代表するプロジェクトであり、日本人はあくまで補佐役で、主役はトルコ人でなければならないようである。

神野健二は、大正商事で、この一千億円プロジェクトのファイナンスをサポートしてきた。三島喜朗は、工事を請け負った東京重工の名前を背負い、このプロジェクトの現場所長としてすでに四年以上現場に駐在している。このプロジェクトは、ボ

スポラス海峡を挟む西洋と東洋を繋ぐ第四の橋として、イスタンブール市街の北側に建設されている。

近年のイスタンブールの発展は目覚ましく、市周辺、特に海峡の東側（アジア側）では市街化が勢いを増して広がっている。それにともないボスポラス海峡を横断する交通量は増大し、既設の三橋の上は渋滞が常態化して限界に近づいていたのだった。プロジェクトの施主はトルコ政府なのだが、投資資金を請負者が調達するというＢＯＴ方式のプロジェクトなのである。大正商事は、建設費用を日本の輸銀、世銀、一般銀行などから調達し、費用面から、このプロジェクトの根幹を支えてきた。

黒海からボスポラス海峡を南下するとマルマラ海に至るが、海峡の最南端の西側に小さい入り江があり、これをゴールデンホーン（金角湾）と呼ぶ。この金角湾とマルマラ海に挟まれた

小さい半島のようなところは城壁で囲まれており、また金角湾の北側の丘にも城壁が残っている。これらの城壁で囲まれたところが昔のコンスタンティノプールの中心街で、現在ではイスタンブールの旧市街と呼ばれる。現在のイスタンブールはこの旧市街を中心にして扇上に広がって市街を形成していると言ってよい。ボスポラス海峡にはすでに三橋の吊橋が架かっており、旧市街近くから黒海に向かって、第一大橋、第二大橋、第三大橋と呼ばれている。今回の第四大橋は、第二大橋と第三大橋の中間に建設されているのである。

神野のオフィスは北側の旧市街にあり、金角湾を見下ろす高台にある。このオフィスで大型ファイナンスのバックアップのほかに、さまざまな資材の調達、トルコ運輸省との交渉を行ってきた。工事は途中、様々な困難に直面した。特に八百人を超

すトルコ人を雇い、技術指導をしながら工事を進めてきたが、トルコ人と日本人との間で、様々な処遇に関する意見の衝突でトルコ人労働者がストライキに出たということもあった。これは意見の衝突というより、特に賃上げ目的という面が強く、神野も事務所のトルコ人スタッフを使って側面的に交渉をバックアップした。様々なことが脳裏に浮かぶが、なんとか橋げたが海峡を跨ぐところまできたのだった。誰にとっても大きな感慨であることに違いはない。

橋の中央で、橋げたを繋ぐ最後のボルト締めのセレモニーが行われた。エルドアン大統領と首相、運輸大臣が並んで、金色にメッキされたボルトを一本ずつ、レンチで締め付けた。同時に数百人の拍手と歓声が上がった。同じように神野と三島も遠

くから拍手を送った。
「大統領が来られたことで、現場の士気もあがりますな」
神野は、三島がやはり誇らしげにしているのを見て言った。
「間違いないな。でも、さまざまな人種がいるから、一方通行で喜んでいるかどうかだな」
三島は、現実にトルコでの労務管理の難しさを回想しながら言った。
「クルドのことですね」
神野も、いろいろなことを思い出していた。
　現場の労働者は、トルコ人とはいえ様々な人種で構成されていた。特に、トルコのはるか東部から職を求めてイスタンブールに移動してきたクルド人が二百人以上働いていた。クルド人は一族を連れて東方からやってくる。一人雇うと他の一族の者

も雇ってほしいという。逆に、一人の契約が終わると一緒に来た者が全員いなくなるということもある。ただ現場で雇ったクルド人らは総じて勤勉で、日本から来た職人ともうまく連携をとって仕事をしており、三島らはこれらのクルドの人たちを好意を持って見ていた。一方で、一般のトルコ人との確執があり、労務管理は想像していたより難しいものだった。

セレモニーが終わって、エルドアン大統領や首相らを乗せた黒塗りの大型車が四月の陽光の中をできたばかりの橋げたの上をゆっくりと進んで行く。この後、ヨーロッパ側の塔の下のボスポラス海峡が間近に見える広場で、トルコ人労働者と大統領一行との懇親会が行われるのだ。

車のない神野ら関係者は、一斉に橋げたの上をヨーロッパ側

に向かって歩きだした。橋の長さは、1.5㎞あり、橋の中央から懇親会の会場まで一キロほど歩かなければならない。数百人の人たちが一斉に歩くだけで、それそのものが、ひとつのセレモニーに思えた。多くのトルコ人にまじって、工事にたずさわってきた数多くの日本人の姿も見える。神野は、彼等も、彼等なりの感慨に浸っているのだろうと思いながら眺めた。

懇親会会場には、すでに千人近いトルコ人労働者が、ケバブ、カルヌヤルク、トルコ風ピザなどのトルコ料理をほほばりながら談笑していた。あまりにも多くの談笑の声とたばこの煙で会場は異様な雰囲気になっていた。ただし、トルコもイスラムの国である。アルコール飲料はない。特に、エルドアン大統領は、最近ますますイスラム色を強めている。国際的なプロジェクト

であろうと、イスラムにのっとった懇親会でなくてはならない。
神野らが着くと、大統領のまわりにトルコ人労働者が集まり、大統領がなにやら労働者に話しかけている。その近くからテレビカメラがさかんに、その様子を撮ろうとしている。この様子がトルコ全土に放映されるのだろう。

多くの政府関係者をバックにして、大統領が現場事務所の関係者と労働者に向かってスピーチを始めた。
「みんな、ここまでよく頑張ってくれた。これこそトルコ人の英知と誇りの賜物である」
「日本やほかの援助はあったが、実際にここまでやれたのは、トルコ人の力であり、あなたたちの努力である。・・・・・・・」
などと、トルコ人関係者への礼賛の言葉が続く。

神野は、やれやれと思いながら目を大統領からそらした。目を移した先に、多くの政府関係者の一人と話している背広姿の日本人らしき男が目に留まった。神野に見覚えがあったが、名前は浮かんでこない。

今度は、隣で同じようにやれやれという顔をしている三島に言った。

「今夜一杯やりませんか」

「そうだな、俺たちへの感謝の言葉もたくさんしてくれたらいいが、そうもいかんようだしな」

三島も今夜くらいは、日本人だけで飲みながら語りたいと思っていたのだ。

「ではサリエールのビッグウエーブでどうですか」

「おお、いいな。よし、身内で乾杯しよう」

イスラムの国とはいえ、イスタンブールは、ヨーロッパであり、ほとんどのレストランで、ワインそれもトルコワインやトルコリキュールである「ラク」を出している。エルドアン大統領のイスラム化への思いとは逆に、人々の西欧化への思いはますます強くなっている。ただし、人々はあくまでもイスラム教の教徒であり、むやみに酔っぱらうほどにアルコールを口にするのは、ありえないとも思っている。

サリエールの夜

サリエールは、橋の現場からほど近い海沿いの小さな町である。また、黒海の入り口にも近く、古来、船舶航行の要衝であ

った。その街の中でもビッグウエーブは、海に突き出たところにあり、田舎町にしては洒落た店という評判が広がり外国人にも知れたレストランである。

三島は彼の主だった部下を二人連れてきていた。すでに料理は注文されており、神野が席に着くとすぐにワインで乾杯する。ワインのグラスを持ちながら話が始まり、昼間のセレモニーの話題でにぎやかになる。三島らには、この橋は日本人である三島らによってできたと思っており、昼間に行われたトルコ人を大きく持ち上げた大統領のスピーチを思い起こしては、自分たちの高い技術があったればこそここまで来たのだなどと、自分たちの貢献の高さをみずから語ることで、溜飲を下げるとともに、全員が完成に近づいた喜びを語り合った。ひところ自分た

ちの苦労話や自慢話をした後、三島が神野に言った。
「お前、大統領がスピーチしていた時に、ネクタイをした日本人がいたのを見たか」
「ああ、俺も気づいた。見覚えのある気がするのだが、誰だったか思い出せない」
「俺はお前の会社の関係だと思ったよ。こんな現場にネクタイをしてくるやつは、日本の商社の人間くらいだろう」
「俺も会社の関係でどこかで会ったような気がするのだが・・」
この話は、これだけで、続きを話すには、それ以上の情報がなかった。

隣の席のドイツ人と思われる連中と、東洋人でいかにも橋の現場の人間と分かる恰好をしている神野らだけがアルコール類

に顔を赤らませ、話に夢中になっている。
これを遠くの席から見つめる日本人とおぼしき男とトルコ人の男の二人ずれがあった。日本人らしき男は他のトルコ人と違い、ネクタイに背広姿である。トルコ人は、他のトルコ人と同じようなジャケットにノーネクタイである。彼らはワインを楽しむような雰囲気ではなく、串焼きのケバブをつまみながら深刻そうに話をしている。周りには、彼らに注意を払うものは、誰ひとりいない。
その時、二人連れが入口のドアに現れた男に気づき、二人とも一斉に席を離れ、別々に早足にテーブルを後にした。日本人らしき男は、神野に向かって足早に近づく。しかし、神野はすでにかなりワインの酔いが進み、男の気配すら分からない。神野の後ろに来ると、男は、

「・・・、・・・・・、・・・してくれ」と言って、何かを神野の作業着の胸ポケットに入れると、足早に立ち去った。神野は何を言われたのか聞き取れないまま、男の後ろ姿を見送った。三島らもワインと話に夢中でほとんど何が起こったのか分からず、男が立ち去った後も何事もなかったように、橋の工事の話に夢中であった。

神野が三島らと別れてビッグウエーブを出たのは、〇時近くであった。神野はイスタンブールのオフィスの近くにひとりで住んでいる。店を出て、店に頼んであったタクシーに乗り込み、車のシートに身を任せて三島らとの話を思い出していた。どう考えても、このプロジェクトの成功は、神野や三島らの努力の結果であり、俺たちが言わなくても現場工事に実際にかかわっ

たトルコ人は十分に理解しているはずだと改めて思い、三島らの顔を思い浮かべた。

ほろ酔いで眠気に誘われそうになったその時、タクシーが石畳の道路に入り、小刻みに揺れ始めて目を覚ます。そんな時に、レストランで誰かが胸ポケットに何かを入れて行ったのをふと思い出した。胸元を探った。それは、コンピューターのメモリースティックであった。

暴漢

神野はオフィスと同じ金角湾の北側沿いを走るドナンマ通りのアパートの一室で、すでに始まっている通勤ラッシュの車の騒音で目を覚ました。ベッドから起きながら、昨夜は、三島ら

現場の連中といい酒が飲めたと思った。しかし、プロジェクトはまだ半年以上残っている。まだまだ神野の役割も残っている。もう一息頑張らねばと自分に言い聞かせた。

朝食は厚切りのパンとゆで卵と牛乳がいつものパターンである。いつものようにテレビをつけてから、タブレットのメールをチェックする。特に急いでやる必要があるものはなさそうである。そう思いながら、厚切りのパンにバターと蜂蜜をたっぷりのせてかぶりつきながら、テレビのニュースに目を戻した。

たいしたニュースはなさそうだなと思いながら、牛乳をとったとき、

「東洋人と思われる人間が、第二大橋の橋脚近くの海に浮かんでいた」という文字が目に留まった。つまり、日本人かどうか

分からないが東洋人の死体が、ボスポラス海峡の第二大橋近くの海で発見されたということである。最近は、外国人が死体で発見されることもたまに見かける。治安が悪化していると思わざるを得ない。

朝食を食べ終わり、オフィスに出かけるために着替えを始めたときに、そういえば、昨夜、誰かがメモリースティックを胸ポケットに入れて行ったなと思いだす。ソファにひっかけたままの作業着を探ると確かにそれはあった。

オフィスは、金角湾の北側のアタチュルク橋の近くのビルにある。この辺りは、ブルーモスクやタクシム広場などの名所がひしめき合う旧市街であり、観光客には人気のところであるが、

車の混雑がひどくビジネスにはとても便利なところとは言えない。大正商事のトルコ支店はアンカラにあり、イスタンブール事務所は神野のほかにトルコ人スタッフが四人いるのみである。

神野は、オフィスに入って、

「グンナイディン（おはよう）」とスタッフに声をかける。

「グンナイディン。健二」

スタッフも顔を上げてそれに応える。神野は、イスタンブールにきて四年になるが、十分なトルコ語ができるとは言い難い。

一方、スタッフは、能力の差はあるが、日本語ができ、英語もできる。経験はいろいろだが、それぞれ大学で日本語を専攻したり、トルコにある日本の会社で働いた経験があるのだ。

神野はデスクに向かって座るとすぐに、コンピューターを起

動する。起動したコンピューターに昨夜のメモリースティックを差し込む。しばらくして、反応が出る。クリックすると、「S-Project」というファイルがひとつだけ出てきた。これをダブルクリックする。すると、パスワードを入れるように要求が出た。つまりパスワードがわからないと、このファイルは開けない。開けないが、とりあえずコピーしてコンピューターに取り込んだ。

近くのデスクにいるエメルに、

「エメル、この中のファイル、パスワードがないと開けられない。なんとかならないかね」

エメル・コルテュルクは、もとＩＴ企業にいた才媛で、神野よりコンピューターに詳しい。

「貸してみて、設定を解除できる場合があるのよ」

「おお、それは頼もしい」
エメルは、メモリースティックを差し込み、コンピューターのキーボードをいじりだした。
この段階になると、神野には手も足もでない。
しかし、十分ほどして、
「健二、これは無理ね。一般的な方法では解除できないわ」
「では逆に、特別な方法があるのかね」
「いろいろな方法があるけど時間かかるわよ。大切なものなの？」
「いや、そうではない。では時間がある時に試してみてくれないか」
「わかりました。じゃあこれ、あずかっておきますね」
神野も日常の業務に戻った。

午後になり、エメルに再度メモリースティックのファイルを開けようとしてみたか聞いた。
「エメル、朝のメモリースティック、いじってみてくれたかい？」
「ごめんなさい。今日は、忙しくて、まだやる時間がないのよ」
「分かった。では、その忙しい一日が終わったら食事でもしませんか」
神野は、忙しそうにしているエメルを眩しそうに見ながら食事に誘った。
「テシェキュラ（ありがとう）」
「では、メシャーレでどう」
「いいわね」
メシャーレは、有名なブルーモスクの近くにある店で生演奏

もあり、デートスポットでもある有名な店である。

エメルは、西欧よりのふっくらしたトルコ美人である。東洋と西洋の交差点であるトルコは、いろいろな人種が混在し、またその混血が進んだ結果、西欧よりの人、東洋的な人、一目でアラブ人と分かる人など、日本人から見るとトルコ人とはどんな顔の人を言うのだろうと思ってしまう。

エメルは、もちろんイスラム教徒であるが、少なくとも神野と食事するときは、ビールもワインも口にする。このあたりは、イスタンブールにいる一般的な女性ということができる。

「朝のメモリースティックはどうしたの？」

赤ワインで乾杯して、昨日の橋のセレモニーの話を散々した後にエメルが訊いた。

神野は昨日の夜、三島らと食事し、大いに飲んでいた時に誰かが自分のポケットに入れて立ち去ったことを話した。
「健二、それは何か怪しい話ね。どんな人だったか覚えていないの？」
「一瞬のことだったし、かなり酔っていたから、黒っぽい服を着た男とくらいしか覚えていない。彼が何か言ったのだが、何語だったかも分からなかった」
「危ない目に合う前に、早く捨ててしまった方がいいのではない？」
「そうだな、面倒なことに巻き込まれるのはいやだな」
神野もこの話は、どうも面倒なことになるかもしれないという不安を感じていた。明日になったらさっそくメモリースティックを処分しようかと思った。

「エメル、君の感のよさはいつも感じているよ。この話は早めに処理しよう」

二人は、タクシーを拾って神野のアパートに向かった。二人がお互いを恋愛の対象と意識しだして一年ほどになる。エメルはイズミールの出身で、イスタンブールの大学を出た後、そのままイスタンブールにひとりで住んでいる。大学の日本語学科を卒業してＩＴ企業に就職し、主にトルコにある日本企業の依頼を受けて、トルコでのＰＲの製作などに係わった。そうした中で日本に派遣され、長期に滞在することもあった。こうしてエメルの日本語は非常に流暢になり会社からの信頼も厚かった。それなりに仕事の充実感はあったが、客先の要望に応えようとすると長時間労働は避けられず、その割に給料が安くて虚しさ

が募りやめてしまった。そんな折に、大正商事のイスタンブール事務所の求人に応募したのである。仕事は、イスタンブール周辺の企業を対象にした日本およびその他の国との貿易のサポートである。

神野は、すでに四十六才になるがひとりものである。過去に一度結婚した経験がある。しかし、その結婚は、数年で破たんし、以後は、ひとりの生活を長年続けてきた。結婚が破たんして、日本にいるのをつらく感じていた時に、マレーシアのクアラルンプールに赴任になった。東南アジアを中心に、今回のようなプロジェクトの立ち上げから現場の実行までサポートする仕事に邁進してきた。商社の人間でも大型建造物を、身をもって完成させる喜びを感じることができた。

東南アジアの蒸し暑さと比べると、イスタンブールの四季は、

日本人の季節感をよみがえらせてくれる。冬は雨が多く雪も降るが、春の喜びが迎えられる。四月は長く寒かった冬が終わり、太陽の光がまぶしくなる始まりである。

タクシーに乗ると、神野の左手がエメルの腰を抱き寄せた。それに応えるように、エメルも神野の腕の中で体が熱くなっていく。神野の唇は、すでにエメルの唇に強く当たっていた。エメルも右手を神野の首に巻きつけている。

メシャーレからドナンマ通りの神野のアパートまで二十分ほどであるが、二人は車がアパートの前に着くまで外に気を向けることなく、唇を重ねあっていた。ドライバーに「着いたよ、」と言われ、やっと手を離した。

タクシーを出て、アパートの扉を開け、エレベータに乗ったときも、神野の左手はエメルの肩を抱きしめたままである。神

野の部屋は、三階にある。

部屋のドアのカギを開ける。

「えっ、」と神野の口をついて出た。

ドアのカギがかかっていない。

「カギが開いている！」

「かけ忘れたのじゃない？」

素早くドアを開けて中に入り、リビングのスイッチを点ける。

「あっ、」とびっくりした声が、またも二人の口をついて出る。

ソファのマットは、捲られ、テーブル横の棚にあったものは、ほとんど床に散乱している。キッチンにまわると引出しは開けられ、中にあったものが床に散乱している。ベッドルームでは、マットも枕もひっくりかえされていた。

「物取りが入ったな」
「でも、ひどいことするわね。なんなの、これは、」
神野は、とにかく警察に電話した。

一〇分ほどして、パトカーが一台きて、二人の警察官が現れた。神野は帰ったときに、すでにドアのカギが開いていたことを話した。カギは、誰が持っていたのか、どこに保管していたのか、かけ忘れたのではないか、アパートの扉はどうやって開けるのか、などを聞かれた後、何を盗まれたかと聞かれた。物が床に散乱しており、自分でも、実際何がとられたのかこの状態ではわからない。ただ、この日は現金とクレジットカードなどは持ち歩いていたので、部屋には家財道具とちょっとした装飾品があったのみだと思ったが、もう少し調べないと分からな

いと答えた。
一五分ほどして、さらに二台のパトカーが来て、鑑識官と思われる人たちが指紋や足跡などを調べ出した。その間に、神野はなにか盗られたものがないか慎重に見てまわった。エメルも心配そうに鑑識官の作業を見ている。
腕時計、カメラ、パソコン、タブレット、ＤＶＤ、ギター、テレビ、など少しでも金目になりそうなものは無くなっていないようである。そのことを、最初に来た警察官に伝えると、「そうですか。では、貴重品は何も盗られていないということですね」と、ふっと気を緩めた感じの顔を見せた。
一時間ほど鑑識官が作業して、最後に神野とエメルの指紋をとって帰って行った。他の指紋が出たら神野らの指紋と照合するのだろう。帰り際に、「何か進展があったら警察から連絡しま

す。また後で盗られたものが分かったら、そちらから被害届を出してください」と言われ、管轄の警察署の住所と連絡先をくれた。

警察が帰った後、二人は床に散らばったものをとりあえずテーブルに載せたり、キッチンの上に並べたりし、ソファとベッドをもとに戻した。

夜も遅いので、とりあえずベッドに入って寝ることにした。ただ、二人ともすぐに寝入ることができない。神野は、あらためて思い直してみた。

―カギは壊されていなかったが、侵入者はどうやってカギを開けて入ったのか。

―何かを探したように乱暴に部屋中をかき回している。今のと

ころ貴重品が取られていないことを考えると、単なる泥棒ではないのではないか。
―結局、何も盗られていないようであるのは幸いであった。だが目当てのものが見つからなかったとしたら、また入られるのではないか。
―とにかく、カギは、新しいものに交換しよう。
「健二、なにか普通の物取りじゃないような気がする。気味悪いわ」
同じようなことをエメルも感じていたのだ。
「そうかもしれないけど、今日は、もう何も起きないよ。もう寝よう」

次の日、エメルが出勤した後、神野は鍵屋を呼んでドアのカ

ギを最新式のものに交換し、さらに窓にも侵入防止用のカギをつけた。鍵屋が帰った後、とりあえずテーブルやキッチンに並べたものを、ひとつひとつ元に戻していった。やはり、何も盗られていない。

もう昼近くになっていたので、事務所に電話して午後から出ると伝えた。朝から何も食べていないので、遅い朝食兼昼食をとることにした。いつもの厚切りのパンと牛乳、それにゆで卵を用意してテレビのスイッチを入れた。ちょうど昼時のニュースをやっていた。

いくつかのニュースの後、「昨日、第二大橋の下の海峡で発見された死体は日本人であった」というフリップが流れた。名前は、キシダコウスケというらしい。事故なのか事件なのかは不明ということであった。後で時間があったら、ネットで詳細を

見てみようと思った。
昨日は車を事務所に置いてきたので、外に出てタクシーを拾い、事務所に向かった。外に出たときに、何か少し違和感があったが、気のせいかなと思い、そのまま気に留めなかった。
「メルハバ（こんにちは）」
「泥棒が入ったそうじゃないですか、大変でしたね。それでどうでしたか？」
スタッフの皆が心配して声をかけてくれる。
「部屋を荒らされたけど、何もとられていないのでラッキーでした。心配してくれてありがとう」
あまり皆に心配をかけたくないと思い、冷静な顔を作って応えた。
エメルも神野が入ってくると、

「どうなった？何か進展はあった？」と心配そうに聞いてくる。
「いろいろ調べてみたけど、何も盗られていなかった。大丈夫と思うよ」

夕方、昼に見たテレビのニュースを思い出し、ネットで日本のサイトを検索した。いくつかの記事がヒットした。それによると、
「持っていた名刺から、発見された死体の名前は、岸田康介、勤め先は大東商会と推測される。死因は溺死で、なんらかの事故によるものではないか」と続いていた。
大東商会というのは、大正商事の関連会社である。海外との貿易では、さまざまな業務をいくつかの会社が分担して行うケースがある。大東商会は海外の輸送ルートに詳しく、特に中東、

アフリカなどへの輸出案件などでは大正商事から依頼することがある。そこまで考えて、神野は思いあたった。橋のセレモニーの時に、トルコ政府の関係者と思われる人間と話していた背広姿の日本人らしき男は、この岸田康介ではないのか。神野も東南アジア案件で大東商会に依頼したことがあり、おそらくその時に一、二度、顔を合わせたのではないか。それであの時、どこかで会ったことがあると思ったのではないかと考えた。となると、岸田康介は、神野に関連したことがある人物で、その彼が、神野の近くで亡くなったことになる。そこまで考えて、エメルやスタッフに「ヤルン　ギュリュシュリュ（では、また明日）」と言って事務所を出た。

駐車場の車に乗ろうとしたとき、こちらをちらっと見た人影

に気づいたが、そのまま車に乗り込んだ。アパートまで一五分くらいであるが、通勤には車を運転する。車は、BMW　M2クーペである。神野のひとつの楽しみは、ドライブである。イスタンブールを離れて、マルマラ海からエーゲ海方面の海を見ながらのドライブは、都会の喧騒を一気に忘れさせてくれる。M2クーペは、そのための最高の相棒なのだ。

しかし、次の朝、事務所のドアを開くなり、主任のマフムト・ギュルセルが、大声を上げながら走り寄ってくる。

「健二、たいへんだ。今度は、事務所に空き巣が入った。どうなっているんだ」

マフムトはクルドであるが、有能な営業スタッフで他のスタッフを統括している。

「どうして、空き巣と分かったのだ」
「事務所のドアのカギがドリルを使って壊されていた。これは、この事務所を狙った盗人の仕業だろう」
そう言って、神野をドアのところに連れて行って見せた。
皆がこちらを見ている。部屋を一見すると、神野のデスクが集中的に荒らされているようである。ということは、事務所の内部が分かっていて、明らかに神野の所有物をねらった犯行と分かる。誰がこんなことを、と思いつつ散乱したものを点検しながら元に戻していると、エメルが青い顔をしてそばに来た。
「健二、一昨日、預かったメモリースティックがなくなっているわ。私、あなたがそれほど重要なものとは言わなかったので、デスクの上の小物入れの上に置いておいたのよ」
「そうか、ねらいは、あのメモリースティックだったのだな」

他になくなった物はないか点検しながら、一昨夜の部屋荒らしも、あのメモリースティックをねらったものだったのだと思いをめぐらした。警察沙汰になることを承知で、神野の部屋とオフィスを二度にわたって荒らしたということは、よほど重要な情報があのメモリースティックに入っていたことになる。それも正当な申し出では、理屈に合わないか、相手にとってリスクが大きいことなのだ。これはかなり危険な雰囲気がただよっていることになると思いながらも、スタッフには、

「ＯＫ、おれたちにとってあんなメモリースティックはなんの価値もない。目的の物を手に入れたのだから、もう襲われることはないだろう」と皆に安心するように言った。

「仕事に戻ってくれ。警察には届けなくていいだろう」

スタッフは、まだ興奮がさめず、何がどうなっているのかなど

と話している。
神野は、自分のデスクに向かいながら考えた。あのメモリースティックの中身は、「S-Project」というファイルであった。そして、それはコピーされて神野のパソコンの中にある。しかし、ファイルにはセキュリティがかかっていて簡単には開けない。セキュリティの解除を、エメルに頼んだが、これ以上頼むことは、彼女を危険に巻き込む可能性がある。
「エメル、もうメモリースティックのことは気にかけず、今日は早めに家に帰って、外に出ないようにしてくれ。万一の安全を考えてね」
「そうね、私も自分のデスクから盗られたと思うと気味悪いわ」
夕方、もうこれ以上、悪いことは起きないだろうと思いなが

ら、駐車場のM2クーペに乗り込んだ。昨日ニュースでやっていた岸田康介のことが気になり、M2クーペを駆って死体が発見された第二大橋の橋脚付近に行ってみることにした。幹線道路は車であふれているが、裏道を通りながら海岸道路に行けば、そんなにはかからないだろう。

市街の細い道路を抜けて、海峡に沿った海岸通りのチラギャン通りに入った。曲がりくねった道路であるが、幹線道路よりは車の流れがある。チラギャン通りから第一大橋を抜けたあたりのムアリムナチ通りに入った。車の流れはあるものの、お世辞にも車の流れがスムーズとは言えない。

「まいったな、」と思ったとき、

誰かが車の横から、何かを車の中に投げ込んだ。一挙に車の中

が煙で一杯になっていく。神野はすかさず車を道路脇に停車させてドアを開けて、車の中の煙の出ているものを海に向かって投げ捨てた。

しかし、次の瞬間、誰かの体当たりで神野の体は防波堤まで転がっていった。起き上がろうとした瞬間、今度は顎に強烈な一撃を受け、神野の体は防波堤を超えて、消波ブロックの上に落ちた。一瞬のことであった。

消波ブロックがなかったら海の中に落ちていたはずだった。頭を振りながら起き上がろうとしたとき、腹に向かって蹴りがきた。それを腕でかろうじて受け、瞬時に足で相手の足を払った。

相手は、二人だった。足を払われて、ひとりが消波ブロックの間に落ちた瞬間、もうひとりが顔をめがけてパンチを繰り出した。これも体を捩じってかろうじてよけると、同時に相手の太

ももに蹴りを入れた。こいつも消波ブロックの間に落ちた。すかさず、防波堤の角に飛びつき、上によじ登る。高さのある消波ブロックの上から海に落ちた連中はなんとかよじ登ろうとしているが簡単ではない。

神野はM2クーペを駆ってなるべく現場から遠ざかるため、空いている裏道を見つけては、ところかまわずに走った。胸の鼓動が聞こえるほどに高鳴り、何が何だか分からない。

一時間ほども無我夢中で走ったであろうか、街灯のない工事中の道路に出た。ここは、イスタンブールの山側にある建設中の迂回道路ではないかと推測した。遠くに真っ暗な海峡とそれを挟むように散らばっている星のような小さな明かりが見える。それにしても、神野が空手の有段者であったことが幸いしたと思った。一般人であったら、おそらく重症を負った可能性があ

る。

地下鉄の駅で

エメルはアジア側のコスキュダルに住んでいる。いつもそこから地下鉄を使って通勤している。この海底トンネルを通る地下鉄はマルマライプロジェクトと言って、日本の円借款により建設され、二〇一三年に開通した。地下鉄M2線のシシハーネ駅で乗り、イェニカプ駅でマルマライ線に乗り換えると、ほんの十分ほどで対岸のコスキュダルに着く。

エメルはいつものように事務所から十分ほど歩いて、シシハーネ駅の階段をプラットホームへと降りて行った。退社時間で駅の構内はかなり混んでいる。乗り換えが楽なように前の方の

車両に乗るべく、人をよけながら進んでいった。とその時、後ろの方から人が走ってくる気配を感じた。振り向こうとした瞬間、男の体がエメルにぶつかった。衝撃でエメルの体はホームから線路に向かって転がった。進入してくる電車のヘッドライトが目に映った。ああ、線路に落ちると思った瞬間、頑丈な男の体が落ちるのをブロックした。

「だいじょうぶか？」男が言った。口髭を生やした背の高い頑健そうな男であった。

「大丈夫です。ありがとう、」

ぶつかった男はそのまま何も言わずに走り去ったようだ。

「それにしても、ひどいやつがいるものだ」

「ほんとうに助かりました」

男が起き上がるのを助けてくれる。

「危うく線路に落ちて電車に轢かれるところでしたわ」
運よく、体のどこにも痛みはない。
電車が停車し、待っていた人々が乗り込もうとする。
「俺もこれに乗るのだが君は？」
「はい、私もこれに乗ります。途中で乗り換えてコスキュダルまで行きます」
二人は、いっしょに電車に乗り込んだ。やっと安堵の気持ちが湧いてくる。聞けば、男もコスキュダルの町に住んでおり、名前は、ファルークというらしい。
男はコスキュダル駅でM5線に乗り換えると言う。エメルが分かれ際に再度お礼を言うと、男は「気をつけろよ」と言って何事もなかったように降りて行った。エメルは次のアイルルクチ

シメッセ駅でM4線に乗り換え、次のアジバデン駅で降りる。
エメルは家までの道を歩きながら考えた。
―それにしても危ないところだった。ファルークがブロックしてくれなかったら、今頃、本当に命をなくしていたかもしれない。
―あの時のことをよく思い出してみると、駅で見知らぬ男が走ってきて、ぶつかったのだが、ぶつかった瞬間に手で押されたようにも感じた。
―とすると、偶然ぶつかったのではなく故意にぶつかってきたのかもしれない。
―物取りなら、あんな乱暴なことはしない。私を殺そうと狙ったということ？
―ええっ、では、なんで？

そう考えて不安でいっぱいになるものの、理由が全く想像もできないまま家に着いた。

イスタンブールの丘の上で

神野は、工事中の道路にM2クーペを一旦停めて、先ほどの暴漢は、どういうことだったのかと思いをめぐらした。
―あのメモリースティックをポケットに入れられてから立て続けに空き巣に入られた。
―そして、今、明らかに命を狙われた。
―あのメモリースティックを入れたのは、岸田康介ではないか。
―その情報にからんで、今のように事故に見せかけて消された

のではないか。
—とするとメモリースティックに係わったと思われるエメルも狙われる可能性がある。
神野は、ひとりでアパートの部屋にいるであろうエメルに電話した。先ほどの顛末を話して、彼女も命をねらわれる可能性があることを告げた。すると、エメルから思ってもいない言葉が出た。
「さっき、シシハーネの駅で誰かがぶつかってきて、線路に落ちそうになったのよ。ひょっとして誰かが故意に線路に突き落とそうとしたんじゃないかと思っていたのよ」
明らかに震えるような声が聞こえてきた。神野は青ざめた。これはもう、ただごとではない。
「ひとりで部屋にいるのは危険だ。アディノグル教授の家に行

って、しばらくそこにいてくれ」
「なんてひどいことになったものね。あなたを恨むわ」
エメルは、自分が考えていたことが現実になったことに当惑していた。
「本当にすまない。でも、こうなった以上、君だけはどうしたって守るから言うことを聞いてくれ」
「分かったけど、教授にも迷惑がかかるのではないの」
「可能性はあるけど、今は、教授に頼むしかない」
ヌライ・アディノグル教授は、トルコにおける長大橋の権威で、今のプロジェクトの企画段階から政府側の建設委員会の委員長として監理する立場にある人である。つまり彼の意見はプロジェクトの実行上、大きなウエートがあり、十分に尊重しなければならない。神野はエンジニアではないが、当初から教授

と東京重工との仲介に奔走してきたことで、教授からは大きな信頼をもらっており、最近では個人的な親交を深めている。

アディノグル教授もエメルと同じコスキュダルに住んでおり、家もエメルのアパートの近くである。教授との公私にわたる付き合いの中でエメルを同席することも多くあり、教授もエメルに親しみを持って接していた。神野は教授に電話して、少しやっかいなことに巻き込まれた、今夜だけでいいので、エメルを家に泊めてやってもらえないかと頼んだ。教授は、エメルを娘のように思っている面もあり、快く引き受けてくれた。

アディノグル教授

神野は、しばらく工事中の道路にいた後、そのままM2クーペ

をあやつり、幹線道路に出て、コスキュダルをめざした。コスキュダルは、第一大橋をアジア側に渡った右側にある古くからの住宅街である。ボスポラス海峡を越えてアジア側に渡るには、二つの橋のどちらかを通らざるを得ない。神野は比較的交通の流れのスムーズな第二大橋を通っていくことにした。橋を渡り、E20 から最初のジャンクションを右に折れて、O1 とのインターチェンジで降りるとコスキュダルの街に入る。教授の家は、インターチェンジ近くのアチバデム駅の近くにある。

このあたりは、非常に閑静なところであるとともに、イスタンブール市街には地下鉄で、二十分ほどで行ける便利なところでもある。教授の家のチャイムを鳴らし、神野であることを告げると教授が現れた。教授はすでに七十才をすぎているが、身長百八十センチ、体重百三十キロの大男である。いつもサスペ

ンダーでズボンを吊っている。
「夜遅くすみません。エメルがどうしているか気になって見に来ました」
「おお、健二、どうした、何か大変なことのようだな。まず中へ入れ」
夜遅くであったが、快く迎えてくれた。
「ありがとうございます。エメルは来ていますか？」
「一時間ほど前にきて、今、夕食を食べているよ」
すると、そこへエメルが現れて神野を見るなり抱きついてきた。神野も無事なことが分かり、ほっとして抱きしめる。これを見ながら教授がともかく中へ入るよう促してくれた。
「健二、まあ、君も夕食をいっしょにどうかね。何があったか話してみたらどうかね」

「ありがとうございます。しかし、教授にご迷惑がかかるかもしれません」
「すでに迷惑しているよ」

リビングでは、教授の奥さんのエヴレンが迎えてくれる。
「健二、たいへんなことのようね」
案内してくれたソファに座ると、教授がわざわざ赤ワインのセネレルを出してきて、二人でグラスを合わせる。ワインが喉を通っていくのが実感できる。やっと今までの緊張が和らぎ、ゆっくりとエメルの手をとった。
あらためて教授夫妻にお礼を言った後、橋のセレモニーの話、その後のサリエールでの話、家とオフィスに泥棒が入ったこと、そして先ほど二人とも襲われて危うく命を落とすところだった

ことを話した。
「それはまたやっかいな話だな。わしには何がどうなっているのか見当もつかんが、とりあえず今夜は二人ともここに泊まっていきなさい」
ふたたび教授にお礼を言って親切に甘んじることにした。

橋のセレモニーから三日間があっという間に過ぎた。昨日は神野が二人の男に襲われ、明らかに命を狙われた。またエメルも危うく電車に轢かれて死ぬところだった。教授の家で朝食をいただきながら、これからどうしたものかと思案をめぐらした。もはや神野があの情報を見たかどうかではなく、見たことを前提に事が動いていると思わざるを得ない。襲ってきた「敵」にとって、それほど重要かつリスクの大きな情報なのだ。しかし、

これはあくまでも偶然が招いた災難で、神野個人の問題として考えなければならないと思った。
とその時、携帯電話が鳴っているのに気付いた。相手は大正商事のトルコ支店の支店長、村井義人であった。
「おはようございます。朝から電話をいただきまして、何かありましたか？」
「いや、早急な話ではないのだが、イスタンブールの橋は今回、大統領も出席されてテレビでも大々的に放映された。大いに当社の宣伝にもなった。君もこれまで大変よくやったと評判だよ」
「ありがとうございます」
「そこで、イスタンブールのプロジェクトは、そろそろ終盤なので、次のプロジェクトの受注に動く必要があると思っている。そこで、東部のアタチュルク湖の橋の話があるのを知っている

かね」
「知りませんが、東部のインフラ整備は、イラン、アルメニア、アゼルバイジャンなどとの物流、観光誘致などで、今後必要不可欠という話は聞いています」
「そうだ、政治のからむ話が多いが、一方でうまく政府の要望に応えられれば、チャンスがあると言える。一度アンカラに来てもらえないか。できれば明日でもだがね」
「明日ですか。えらく急な話ですね」
早急な話ではないと言っておきながら、明日来いとは、と思った。
「このプロジェクトの情報が入って、建設プロジェクトの専門家に来てほしいと言われているのだよ」
「そうですか、では、フライトを予約して、また連絡します」

そう言って電話を切った。確かに、イスタンブールのプロジェクトは終盤でとりたてて検討すること残っていない。上からアンカラに来いと言われたら従うしかない。しかし、問題は命を狙われているかもしれないエメルをひとりでおいていくかどうかである。教授の家に預けるにしても、万一襲われたらひとたまりもない。この際、いっそエメルを連れてアンカラに行こうと思った。

電話が支店長の村井からだったことを告げてから、出張のことを話す。

「エメル、支店長から明日アンカラに来いと言われた。君をひとりでここに置いていくのは危ないと思う。いっしょにアンカラに行ってくれないか」

「分かったわ。私も少しでもイスタンブールを離れた方が安全

なような気がする」
神野とエメルは教授夫妻に丁重にお礼を言って、イスタンブールの事務所に引き返した。

事務所に戻って、マフムトらスタッフに明日、エメルと二人でアンカラに出張する旨を告げた。今回のことは神野個人の事件と決めているので、昨夜のことは何も話さなかった。スタッフも昨日、神野とエメルが襲われたことは知る由もなく、一昨日の空き巣のことは過ぎたことのように、とりたてて問題にする様子はなかった。
この日は、事務所のパソコンを持って、エメルも神野のアパートに泊まった。

村井支店長の話

大正商事のトルコ支店は、国鉄アンカラ駅から二つ目の地下鉄駅、キズライ駅の近くにある。村井支店長は時計を見ながら神野が来るのを支店長室で待っていた。また神野からエメルと一緒に来ることも聞かされていたので二人連れで来るのも分かっている。

今回の話はトルコ東部のプロジェクトであると言われたことから、東部のクルド語に通じている人間を連れて行った方が、都合がいいのではないかという屁理屈だったのだが、村井はすんなり了解した。

イスタンブールの橋の現場には、多くのクルド人が働いてい

る。彼らは一人一人個人でイスタンブールに移動してきているのではなく、一族を引き連れてくる。彼らと給料、労働条件などの話し合いは集団での話し合いになり、クルドであることに敬意を払いつつ、彼等の輪の中に入って交渉することも必要であり、クルド語を必要とする場合がある。このような交渉を長年行ってきた過程でエメルもクルド語に精通していたのだった。トルコ語とクルド語は別の語族の言語であるが、現在はクルド語の放送も行われている。

部屋には、村井のほかに二人の男がいて、ひとりは福田芳彦と名のり、もうひとりはトルコ人でハムゼ・ヤルグジュと名のった。二人とも神野には面識がなかった。二人とも大正商事の人間で、トルコを中心に中東、中央アジアとの貿易をやっているとのことであった。福田の名刺には、中東営業部部長とあっ

た。五十代くらいで短髪のがっしりした体の男である。村井が、皆をテーブルに促し、
「神野君、よく来てくれた。急な話で申し訳ないな。エメルも久しぶりだな。君にも手伝ってもらうことになるかもしれないから一緒に訊いてくれ」と言ってから、
「電話で言ったように、イスタンブールのプロジェクトも終盤なので、できれば同じようなインフラプロジェクトを続けてやりたいと思っている。今回、福田部長が有力な情報をつかんできたので、できれば君にやってもらいたいと思っている」
神野も場所は辺境であるが東部の雄大な自然を思い描くと、参加できたらいい仕事になるかもしれないと思い胸が高鳴る。
「分かりました。どんな話かぜひ聞かせてください」
「じゃ、福田部長、説明してくれますか」

福田によると、アンカラから直線距離で六〇〇キロほど東に行ったところにあるシャンルウルファからネムルート山を経由してマラティヤまでの高速道路計画がある。このルートを最短で結ぶにはアタチュルク湖を横断する必要がある。アタチュルク湖はユーフラテス川の上流にあるダム湖で、水深が深くい。ここに橋をかけるとすると、ボスポラス大橋のような特別な橋が必要になる。つまり、特殊橋梁プロジェクトで円借款または日本の援助の対象になりやすい。これにいち早く道筋をつけられれば、大正商事でプロジェクトを受注できる可能性があるということであった。

福田は、さらに説明を続ける。

「今回のように東京重工を連れてくるか、他の工事会社を連れ

てくるかは、さらに検討する必要があるが、まずは現地を見てどんなプロジェクトであるか、あるいはどんな橋梁が必要になるかを考えてもらいたい。当社ではこのような橋梁プロジェクトになると、君をおいてないと支店長から伺った。アンカラまできたついでに、明日にでも現地を見てくれないかね」

「明日ですか。また急な話ですね。しかし、おっしゃるようにまた出直すのも手間ですので、おっしゃるようにしましょう。」昨日、アンカラに来いと言ってきて、明日は東部の田舎まで行けと言う。神野は、えらく拙速なことだと思った。

「そうか、それはありがたい。では明日、このヤルグジュが案内するので、それにしたがってくれるかね」

「分かりました」と言って、ヤルグジュという男を見た。あごひげの濃い見慣れた感じのトルコ人であるが、きつい目をした

男だなと思った。ヤルグジュはにこりと微笑んで、
「では、明日はよろしく。飛行機と車をすぐに手配します」と英語で言った。
村井は、話がまとまり満足そうである。
「よしっ、話は進みそうだな。もう夕方だが夕食でもどうかね」
そう言って神野を夕食に誘った。急にアンカラまで呼び出して、明日には東部の現場を見てこい言われ、夕食くらいは誘ってくれるだろうと神野も思っていた。
「ありがとうございます」
「では、後で一緒に出よう」
支店長の村井は、普段はあまり自分の考えを押し出さないが、人種を問わずどの人にも、どのように接するべきかをよく心得た男である。まさに海外支店の支店長にふさわしい男である。

村井は、神野とエメルを連れて、タクシーで村井が予約した店に向かった。福田とヤルグジュは一緒ではなかった。支店のオフィスを出る前にヤルグジュから明日のフライトを予約したので、空港で待ち合わせようと伝えられていた。店は、「Yelken Balik Seyfi」という地中海料理のレストランで、オフィスから車で十分ほどのところであった。

「エメル、今日は海鮮だがいいかね」

「ええ、魚料理は大好きです。楽しみですわ」

「アンカラにはあまりいい日本食がなくて、アンカラの日本人はこういう店によく来るのだよ」

アンカラは、黒海から二〇〇キロほど離れた内陸の都市であ

るが、けっこう多くの魚料理店がある。トルコの魚料理店では調理前の魚をいく種類も見せにくるので、お好みのものを選んで揚げるか、煮るかを伝えて調理をしてもらう。
村井が注文した赤ワインがくると三人で乾杯した。
「二人とも、急なことだったがよく来てくれた。新しいプロジェクトに乾杯しよう」
神野も次のプロジェクトに対応することができそうな高揚感があるのを感じていた。大きなプロジェクトを前にしたこうした高揚感はプロジェクトを達成してきた者にしか分からない。イスタンブールでの事件のことを忘れて、村井が誘ってくれたことに感謝していた。
グラスのワインが減っていくに従って、三人の会話も弾んでいく。そうした会話の中で、村井は神野とエメルが親しそうに

眼を交わすのを見て、すでに神野とエメルが特別な関係にあるのだろうと推測していた。
「君たち、今日はどこのホテルにしているのかね」
「シェラトンを予約しています」
「ああ、それならここからすぐ近くだ。明日は早いだろうから、ゆっくりしてくれ」などと気遣ってくれる。やさしい上司である。
そんな村井に、神野はカーペンターフィシュのから揚げを食べながら訊いた。
「福田さんには初めてお目にかかりましたが、以前からトルコ支店におられましたか？」
「いや彼は支店ではなく、本社の人間なのだ。中東の仕事を主体に動いていて、この数か月間、支店の隣のビルに部屋をかり

て仕事をしている」
「では、福田さんはトルコのインフラに詳しいというわけではないのですね」
「と思うが、彼はトルコ政府の人間と頻繁に会っているようだ。おそらく、その中で今回の情報をつかんだのだと思う」
「情報の出所を支店長もご存じない？」
「ああ、わしも確かめようと訊いたのだが、はっきり言わない。しかし、今日聞いたようにかなり詳細で、現実味があるように感じた。そこで、さらに現実感があるのか、逆に君に見てもらいたいと思った次第だ」
「そういうことですか。分かりました。いろいろな角度から眺めてみます」
「頼む、うまくいくといいのだがな」

どういう情報か正確には支店長も把握していないと聞いて、プロジェクトが取れるように頑張ろうと思った先ほどの高揚感がやや薄らいでいくように感じざるを得ない。

村井と二時間ほど食事をし、レストランで別れた。まだ夜九時前と早いのでホテルのバーにエメルを誘った。シェラトンアンカラは高台に建っているので、建物の中ほどにあるバーからも夜の眺めを楽しめる。きらびやかな照明とデコレーションで飾られたバーに入り、カウンターに並んで座る。エメルは、ホワイトレディというジンベースのカクテルを注文し、神野のドライジンがくると、二人で再度乾杯する。

「エメル、疲れただろ？」

「そうよ。この数日間、いろんなことが起こって、その後にア

ンカラまで来たのだもの」
「君を巻き込んでしまって、ほんとうにすまない。しかし、イスタンブールから出た方が安全だと思ったからな」
「私もそう思うわ。それに健二といっしょだと安心よ。でも今日会った福田さんという人は、なんとなく冷たい感じのする人ね。それに、ヤルグジュという人は、あまり日本の商社で働いている感じの人に見えないわね」
「そうだな、支店長は、福田さんは本社の人で中東関係の仕事をしていると言ったがそれ以上はよく知らないようだった。おれも彼等がどんな仕事をしているのか予測もできなかった」
「私、なんとなく不安だわ」
「大丈夫、彼等も大正商事の人間だよ。エメル、愛しているよ」
と言って、軽くキスをした。

「健二、私も愛しているわ」

アンカラは、内陸でなおかつ高地にある。夜になると、四月では、まだ寒さが増すのであろう。外の歩道には、ダウンを着た人たちが行きかっている。

部屋に戻りドアを閉めた途端、神野は、エメルを抱き寄せた。エメルも両腕を神野の首に巻き付け唇を重ねた。二人とも、ここ数日間に降りかかったことを振り払うように互いの唇を求め合った。しばらく立ったままお互いを抱きしめ合った後、そのまま崩れるようにベッドに倒れていった。その後互いの愛に没頭するように、いつまでも愛し合うことをやめなかった。

シャンルウルファで

アンカラからシャンルウルファまでは直行便がある。一時間ほどのフライトである。

シャンルウルファは、アンカラから東方に六〇〇キロほど行ったところにあり、古代メソポタミアにさかのぼる古い歴史のある町である。エメルによると預言者アブラハムの生誕の地という言い伝えもあるとのことである。シリア国境にも近くユーフラテス川の東に開けている大きな盆地の中心都市である。

昼過ぎにシャンルウルファの市街地に到着し、狭い通りに車を駐車した。

「橋の候補地は、ここから車で八〇キロほどのところにあります。まずは、昼食をとりましょう」

古代を思わせるような街を歩きながらヤルグジュが英語で言っ

た。
「このあたりは、このような古い遺跡が残っているところが多いのでしょうね。歴史のロマンを感じさせますね」
神野は、初めて見る古代の雰囲気にのまれ、街の古い歴史に思いをはせていた。
「多くの遺跡がありますが、この旧市街の外側に新市街が広がっていて近代的なビルも建っています」
神野の思いとは別に前を見ながら淡々と答えた。
　三人はいかにも地元風の古びたレストランに入り、この地方で有名だと店主から言われた料理を注文した。
「なぜ、このシャンルウルファから北に向かう高速道路の計画がもちあがったのかね」
神野が運ばれてきた郷土料理を食べながらさらりと訊いた。そ

れを聞くと、ヤルグジュは食べるのを止めて即座に、
「ユーフラテス川を堰き止めて、アタチュルク湖を造ったのですが、これを迂回してマラティヤに行くためには、四〇〇キロ以上走る必要があります。またアタチュルク湖の北側にあるネムルト山は観光の目玉と期待されていますが、十分な道路が整備されていません」などと説明した。
このあたりの地理に疎い神野は、そうかなと思う他なかった。エメルの方を見たが、彼女もイズミールの生まれで、この辺りについて詳しそうではなかった。

昼食後ヤルグジュの運転で、街からE99の高速道路をしばらく北上すると、先ほど着いたシャンルウルファの飛行場が見えた。昼食をするために街に行ったのだなと思った。さらにしば

らく走ってヒルワンという町から一般道を小高い山に向かって走る。山を越えると平地が見えてくる。広大な農地が広がっていた。農地をつき切ると、広大な青い湖が見え始める。湖の対岸には切り立った断崖から山の裾野が延びている。さらに車は湖岸道路を走ってく。湖と言ってもダム湖である。湖の端は切り立った断崖のようになっており、湖の深さが想像される。

湖岸道路をしばらく走って、ヤルグジュが広い路肩のあるところに車を止めて、

「このあたりと思いますが、少し見てきます」と言って、エンジンをつけたまま歩いて行った。

神野とエメルは、しかたなく車に乗ったままヤルグジュが帰ってくるのを待った。

数分ののち、神野の目がこちらに向けて疾走してくる大型ト

ラックをバックミラーにとらえた。
「えらくスピードを出しているな、危ない！」と思った、次の瞬間、大型トラックが神野らの車に突っ込んできた。
「キャー」というエメルの叫び声とともに神野らの車は、そのまま湖にダイブしていった。そして、少しの間浮いていた車はしばらくして湖面から完全に消えていった。

そしてアンカラでは

大正商事のトルコ支店の隣のビルの一室で、福田は携帯電話が鳴っていることに気付いた。というより電話を待っていたのだ。電話の相手はヤルグジュであった。
「どうだったか？」

「予定通りにいきました。車は湖に落ちた後、二人を乗せたまま水中に沈みました」
「そうか、その後も予定通りしたのだろうな？」
「はい、一時間以上かけて歩いて、近くにあった民家に助けを求めました。今、現場では救出活動が行われていますが、車を引き揚げるにしても水深が深いので難しいと思います」
「警察には、なんと言ったのだ？」
「我々は大正商事のものでアタチュルク湖に橋梁計画があり、その現場調査の途中に事故にあった。私が計画されている橋の正確な位置を歩いて確認している間に、駐車していた車にトラックが追突した。衝突された車は、そのはずみで湖に落ちてしまった。中には同じ大正商事の神野健二とエメル・コルテュルクが乗っていた。追突したトラックはそのまま逃げてしまった。

というように話しました」
「分かった。彼らの持ち物が残っていたら警察に渡さず、持ち帰ってくれ」
「はい、分かっています」
電話を切って、福田はかわいそうなことになってしまったと思った。しかし、今の状況では避けられなかったと思うしかなかった。

福田は電話を切った後、その足で隣のトルコ支店に向かった。村井支店長の部屋のドアを開けるなり、
「支店長、たいへんなことが起こりました。今日の午後、アタチュルク湖に調査に行っていた、神野次長とエメル・コルテュルクが自動車事故に会いました」と息を切りながら言った。

「なにっ、それで二人はどうなったのだ？」
「車が湖に落ち、車といっしょに湖に沈んでしまったと言っています」
「もうひとりいた、君の部下はどうしていたのだ？」
「ヤルグジュが車を道路脇に停めて、車を離れている間にトラックに追突されたと言っています。」
「ということは、まだ死亡が確認されたわけではないのだな」
「はい、しかし、ダイバーが潜って探しているようですが、水深が深く捜索は難航しているようです」
「君、明日にでも現地に飛んできちんとした情報をつかんでくれ」
村井は、ここは支店長としてしっかり対応しなければならないと自分に言い聞かせるものの、頭の中が白くなっていく気がし

た。

「分かりました。では、さっそく準備します。」

次の日の朝刊に、「日本人、シャンルウルファで交通事故」という小さい見出しをつけ、事故の概要がのっていた。記事によると、湖畔に止まっていた車にトラックが追突し、乗車していた人ごと湖に落ちた。捜索が行われているが水深が深く難航しており、乗っていた人たちは絶望的ではないかとみられている、と書いていた。

三日後の深夜、アンカラにある福田芳彦の暗闇に包まれているオフィスの中で、外から差し込む僅かな光に照らされてうごめく男の姿があった。男が福田のデスクの上のパソコンのスイ

ッチを入れると、すぐにパソコンが起動した。しかし、コンピューターはアカウントのパスワードを要求してくる。男はデスクの中を調べ始め、かたっぱしから引出しの中を見ていく。そのうちにWindowsと書いたノートを見つけた。男はその中からpwと書かれたタグの付いているページを開くと、いくつもの六個の英数字が書いてあるのが見えた。これをかたっぱしから打ち込んでいくと幾つ目かでヒットしてWindowsが開き、「よしっ、」と口に出した。コンピューターに保存されているフォルダーやファイルを慎重に開いていく。

しかし、膨大なフォルダーとファイルが格納されており、一つ一つチェックするには時間がかかりすぎる。「ドキュメント」に格納されているファイルを全部コピーすることにして、メモリースティックを差し込み、コピーを始める。三十分ほど経ち、

やっと終了する。
男はオフィスの内カギをかけ、扉を締めると薄暗いビルを後にした。

アタチュルク湖にプレイバック

次の日の昼近くになって、男はベッドの中で目覚めた。となりには、裸の若い女がまだ眠っている。ここは、アンカラの郊外にあるビルケントホテルの一室である。男は神野健二であり、女はエメル・コルテュルクである。

四日前、神野とエメルを乗せた車はトラックに衝突された反動で湖に投げ出された。道路から七，八メートルも落下したで

あろうか。水面に車の先端が衝突した瞬間、フロントガラスが砕け散り、同時にエアバックが開いた。砕け散ったフロントウンドゥからすぐに水が流れ込んできた。エアバックにしたたかに頭を打ち付けたが、神野は意識があった。後ろを見ると、後部座席に座っていたエメルもヘッドカバーに頭を打ち付けたものの意識があるようでうめき声をあげている。水が勢いよく流れ込む中、自分のシートベルトを外し、後ろの座席に移る。すでに車が沈み始めている。必死になってエメルのシートベルトを外していると水がどんどん入ってきて、外し終わったころには、すでに車は水中にあった。息をこらえて後部ウインドゥを力まかせに蹴った。一発目で全体にひびが入り、二発目でこなごなになった。エメルを押し出しながら車の外に出て、必死で水面まで浮かび上がった。エメルの背後から腕をまわし、岸ま

で泳ぎ着く。二人とも不幸中の幸いと言うべきか、いたるところに打撲症はあるものの、骨折などの重傷箇所はなさそうであった。

「エメル、大丈夫か？」

「なんなのこれは、まったく、死ぬところだったわ」

「おお、それくらい言えれば、大丈夫そうだな」

「これからどうするの？」

「どこか登れるところまで岩場の下を伝って歩いて行こう」

泳ぎ着いた湖岸は、岸壁がえぐられたようになっているところの下にあり、とても這い上がれる状況ではなかった。しかし、岸に沿って、わずかに人が歩けるほどの岩場が続いていた。二人は、湖岸を岸壁が低くなっているだろうと思われる方に向かって歩いた。歩きながら、神野は先ほどの事故は単なる交通事

故だったのかと考えた。バックミラーに映ったトラックは避ける様子もなく、真っすぐに衝突するように突っ込んできた。これは何者かが悪意を持って衝突して湖に突き落としたのではないかと感じざるを得ない。イスタンブールで何者かに襲われたことが頭から離れないことも、そう感じさせるのだろう。

三十分ほど岩だらけの岸辺を行くと、上から下りてこられるように岸壁に梯子がかかっており、湖岸に桟橋ができているところが見えた。桟橋には、一隻の小型ボートが停泊している。ここで、神野はふと立ち止まり考えた。もし、誰かの悪意による事故だったとしたら、むやみに上に上がると、再度、襲われる可能性があるのではないか。何人かが襲ってきたらエメルを連れて逃げるのは危険すぎる。そう考えて、停泊中のボートを

拝借することにしようとエメルに言う。二人はボートに飛び乗ると、神野が手回しエンジンのスターティング・ハンドルを思いっきり引っ張る。すると「ババババッ」という音と共に白煙を噴出した。二人を乗せたボートはスピードを上げて現場から遠ざかって行った。

神野はボートを西に向かって走らせ、シャンルウルファを目指した。一時間も走ると大きく南に切れ込んだ入り江が見えてきた。その入り江を南の端まで走らせると、広大な平地の上を走る道路が見えてきた。ボートを湖岸に停めて、道路まで出ると、幹線道路とまではいかないが、一台また一台とトラックや乗用車がまばらに走っていた。二人してヒッチハイクの要領で手を上げる。するとしばらくして、大型トラックが止まり、運

よく「シャンルウルファを通るから、乗りな」と言われた。トルコではヒッチハイクを見るのは珍しいことではなく、どんな田舎の道路でも手を上げて乗せてもらおうとしている人を見かける。

街のはずれで降ろされ、旧市街まで歩いてイペッキ・パラスというホテルに入った。荷物をすべてなくしてしまっているので、すぐにはチェックインできない。エメルが交渉してホテルの電話を借りることができ、イスタンブールのアディノグル教授に電話した。今、シャンルウルファにいること、大変な事故にあったこと、それも故意を感じる事故だったこと、事故のために荷物がすべてなくなってしまったことを話して、とりあえず、このホテル代を教授のクレジットカードで仮に払っていただけないか、また必要なお金を送っていただけないかとお願い

した。神野からすると厚かましいお願いにもかかわらず、教授は「それは、大変なことだったな。二人ともケガはないのか」と心配してくれ、お金についても快く承諾してくれたのであった。

会社に連絡せずに、わざわざアディノグル教授に電話したのは、この事故が仕組まれた事故だったとしたら、ヤルグジュが関係している可能性も否定できないと考えた。最初からヤルグジュというトルコ人は、抜け目なさそうな目をしており、大正商事のオフィスにいる一般的なトルコ人とは違った違和感を持っていると、二人とも感じていたからである。

チェックインした後、エメルとホテルのレストランに入った。ラフマジュンと赤ワインを注文した。ラフマジュンというのは、トルコ版ピザである。赤ワインのグラスを持ち上げながら、

「とりあえず、生きていることに乾杯しよう」
エメルは、深刻な状況にあると全く青ざめて口もきけなくなるが、一旦それを脱すると、すぐに陽気さを取り戻す。
「ほんとうに、あれだけのことがあったのに大きな怪我がなかったのは、不幸中の幸いよ」
「そうだな。エメルが無事でなによりだ」
「健二、あのヤルグジュという人は、やはり怪しい。彼がわざわざ道路脇に車を停めて、彼が見えなくなった途端に、トラックがぶつかってきたわけでしょ。あんな田舎道を大きなトラックが走ること自体、不自然と思わない？」
「二人ともイスタンブールで誰かに襲われた後だけに、よけいに不信感がわいてくるのかもしれないが、俺もいくつかの不自然を感じる」

「ほかにも何かあるの？」
「この橋梁計画自体が、本当に必要な計画なのかと思っている。君も見たように、このあたりの道路はけっこう整備されている。わざわざ巨大な橋をアタチュルク湖に架けなくとも、迂回道路でメムルト山に行くのもそんなに時間がかからないのではと思う。この計画に対する十分な投資効果があるとは考えにくい」
「ということは、何、これは、私たちをわざわざシャンルウルファまで連れ出すための作り話だったってこと？」
「いや、そういう可能性もあるということだよ。まだ何も確証はない」
「でも、もしそうだったら、私たち大正商事に命をねらわれたことになるのよ。そんなことってありえるの？　村井さんは昨日の夜、あんなに親切にしてくださったのよ」

「いや、村井さんが噛んでいるとは考えにくい。昨日の会議のときの説明にしても、村井さんはこの話の出所も知らないと言った。説明はすべて福田さんがした。万一、作り話だとしたら、福田さんから出た話かもしれない。」
「これから、どうする？」
「万一のことを考えて、当分、会社とは連絡をとらない。このまま行方不明のままでいて、少し福田さんの周辺を調べてみよう」
「えぇっ、私たちこのまま行方不明になるの？ そんなことしたら、何もしらないイズミールにいる私の家族が悲しむことになるのよ」
「すまない。でも少しの間だけだよ。我慢してくれないか、君の安全のためだから」

「そう言われると仕方ないわね。ほかの選択肢はリスクが大きいということね」
「そのとおりだ。教授からお金が届いたら、アンカラに行こう」

その後三日間、この旧市街の路地にあるホテルで、教授からお金が送られてくるのを待った。地元の新聞には、日本人がアタチュルク湖で事故に会い、依然として行方不明であると載っていたが、この古代遺跡を思わせる路地に身を寄せているといろいろな人種の人が行きかい、誰も彼がその日本人であることに気付くことはなかった。

メモリースティックの情報

神野は横に寝ているエメルを起こさないようにベッドから起き上がり、着替えをしてホテルのビジネスセンターに行った。昨夜、福田のオフィスでコピーしたファイルを調べてみようとしているのだ。メモリースティックには、「ドキュメント」に入っていたフォルダーやファイルを全部コピーしてきたのだ。その中にはまるで仕事に関係していると思えないものも含まれていた。また、「トルコ情報」、「イラク関連」、「シリア関連」などの名前がついているものがある。しかし、重要と思われそうなフォルダーを開こうとするのだが、ほとんどにセキュリティがかかっていて、パスワードがないと開けないようになっていた。

なんと用心深い男なのであろうか。昨日、福田のオフィスで見つけたいくつかのパスワードをそれぞれのファイルにためしてみるのだが、ヒットしない。そのうち、神野は、「あっ。」と声を出した。フォルダーの中に、「s　project」と名前をつけたものがあったのである。

イスタンブールで、岸田康介らしき人物が神野のポケットに入れていったメモリースティックの中には、「S-Project」というファイルがあった。そして今、似たような名前のフォルダーが見つかったのである。当然、「s　project」もセキュリティがかかっていて開けられない。二時間ほど、コンピューターと格闘したが、それ以上の進展はなかった。しかし、このあやしいフォルダーを見つけたことは、ひとつの成果であった。

部屋に戻るとエメルは、すでに着替えて、ソファで神野の帰りを待っていた。
「どこに行っていたの？　もう一時間以上ひとりで待っていたのよ」
「それは申し訳ない。君が眠っていたので、起こさないようにと思った。昨夜、福田さんのオフィスでコピーしたものを下のビジネスセンターで見ていたんだよ」
「それで、なにか見つかった？」
「残念ながら肝心のファイルにはセキュリティがかかっていて開けられない」
「自分のコンピューターに仕舞ってあるファイルにセキュリティをつけるなんて、よほど用心深い人ね」
「ああ、俺もそう思ったよ。しかし、中身はわからないが、「s

project」という名前のフォルダーがあった」
「それは、あのメモリースティックにあったファイルと同じ名前よね。ということは、イスタンブールで襲われそうになったことと、今回のことはなにか関係があるってこと？　普通じゃ考えられない話ね」
そうだ、一般的には考えられない話だ。日本の一般的な商社がアウトローに関係するようなビジネスに手を出すということはありえない。しかし、岸田という男の持っていたファイルと福田の持っていたフォルダーの名前が同じだったのは、偶然なのか。この一週間ほどの間に起ったことを思い出すと、偶然としてかたづけられないものを感じざるを得ないのである。

同じ日の深夜、大東商会のオフィス。

大正商事のトルコ支店からほど近いところにある大東商会のトルコオフィスに男の影があった。十人程度の小さいオフィスである。男は懐中電灯で慎重にオフィスの中を見ていく。ふとあるデスクの前で足を止める。デスクには、花瓶に花を生けて置いてあった。パソコンなどはない。男はデスクの引出しの中を入念に調べ始めた。十五分ほどしていくつかのフラットファイルをリュックに入れた。

男は以前と同じように内カギをかけ、何事もなかったようにオフィスビルを後にした。

次の日の朝、ビルケントホテルの一室で神野とエメルはソファに前かがみになって座っている。昨夜、大東商会から持ち出した資料をテーブルの上に積んで、ひとつひとつ開いて中を調

べようとしているのだ。大東商会のオフィスに花瓶に花を生けて置いてあったデスクがあった。これは亡くなった岸田康介のデスクに違いないと考え、そのデスクの中にあった資料の一部を持ち出してきたのだ。

彼等の目的は、もはやあの「S-Project」というファイルのパスワードのヒントがないかどうかであった。つまり、岸田の持っていたファイルと福田の持っていたフォルダーに同じような名前があったとしても、中身を見ないと関連性があるのかどうか確かめようがないからである。

すでに岸田が亡くなって、一週間以上が経とうとしているので重要な資料が残っている可能性は少ない。彼らは持ち出したわずかな資料を綿密に調べて、少しでもヒントになることはないか探った。

「あなたが危険を冒して持ってきた資料だけど、普通にどこかの会社から送られてきた簡単な情報のコピーばかりだわね。特に「S-Project」なんとかというのはないわね」
エメルがため息をもらしながら言った。資料のうち、かなりの部分がトルコ語の資料で、神野にとってはエメルに頼るしかない部分がたくさんあった。
「そうだな、せっかくだが、忍び込んだ意味がなかったかな」
そう言った後、神野はある英語の資料に目を留めた。内容は単なるシリアとトルコの最近の情勢に関する一般的なネット情報であったが、片隅にボールペンのメモがあり、電話番号らしき数字が書いてあり、二重線でマークしてあった。
「エメル、これは電話番号ではないかな？」
「そうね、電話番号だとすると、イスタンブルールね」

「ほかに何かヒントになるものはなさそうだ。この電話番号に電話してくれないか」
エメルは、部屋の電話から書いてあった番号に電話した。しかし、話し中のようで通じない。
「健二、通じないわ。後でもう一度電話してみようか」
二人は、さらに他の資料を調べたが、結局「S-Project」に関する情報は見つけることができなかった。

一時間ほどして、エメルがもう一度電話した。今度は、電話に応答があった。
「アロ、」と女の声が応えた。
「アロ、Kishidaさんのお宅でしょうか？」
「違いますが、どなた？」

「私、大東商会のKishidaさんの知り合いなんですが、Kishidaさんとお話しできますか？」
「あなたご存じありませんか？　Kishidaは亡くなりました」
エメルは、この話のヒントがヒットしたと思った。
「えっ、Kishidaさんが亡くなられたのですか？」
このあたりのやりとりをするエメルは冷静であった。
この後、どういう状況で亡くなったのかなどの会話をした後、エメルは、相手の名前と住所を聞き出した。
「健二、イスタンブールに戻るしかなさそうね」
神野は、あらためてエメルをたくましいパートナーだと思った。

チャウラ・バヤル

神野とエメルは、イスタンブール空港に着いた後、駐車場に置きっぱなしになっていた神野のM2クーペで、まず神野のアパートに向かった。アパートの部屋は幸いにも荒らされた様子はなかった。しかし、行方不明になっていると思っている人たちが、誰かがこのアパートにいることを知ったら不信に思うに違いないと考え、コンピューターなど必要なものをかき集めてアパートを後にした。

昨日、エメルが聞き出した岸田に関係のある女性を訪ねるのが、次の目的である。この女性は第一大橋の近くのイルディツ公園に隣接するアパートに住むチャウラ・バヤルということだ

った。もし岸田と関係ある女性だとしたら、岸田は彼女のアパートから、いくらも離れていない所で亡くなったことになる。
前もって電話しておいたこともあり、チャイムをならすと、直ぐに応答があり、部屋に通された。神野はこの辺りによくある一般的な小さいアパートだなと思った。チャウラ・バヤルは、エメルと同世代のトルコ女性で、黒髪のアラビア色ある美人である。リビングに案内された後、まず二人が日本の大正商事という会社に勤めていること、何か岸田と関係のあることで人から狙われているのではないかと思っていることを伝えた。エメルは岸田が亡くなったことにお悔みを言った後、単刀直入に言った。
「チャウラさん、岸田さんは実際にどのようにして亡くなったのかご存じですか？ご存じでした教えていただけないでしょ

うか。今の私たちにとっても重要なことなんです」
「警察の話では、第二大橋の橋脚の近くの岩場で足を滑らせて、そのはずみで頭を岩に打ち付けそのまま海に落ちたのだろうと言っていました。でも私は、あんなところに、ひとりで行ったこと自体おかしいのではないかと思うのです。あの夜、彼の携帯電話に電話があり、その後に外出してあのようになったのです。私には何があったのか考えられません」
そう言って涙を浮かべた。岸田とチャウラ・バヤルは、たいへん親しい関係にあったことが容易に推察される。
「岸田さんが亡くなる前に、何か変わったことはなかったですか？」
英語で神野が口をはさんだ。
「ありません。Kishida は非常に正義感のある日本人でした。人

に恨まれるような人ではありませんから、何かの事件に巻き込まれたのかもしれません」
トルコ人特有の訛りのある英語で応える。
「Kishidaさんは、どんな仕事をされていたのでしょうか？」
エメルが続けて英語で訊いた。
「Kishidaは、大東商会で物流関係の仕事をしていました。何もやましいことはしていません」
「分かります。岸田さんが亡くなった後、誰か人が訪ねてきませんでしたか？」
「警察が来て、岸田とはどういう関係だったかなどと訊かれましたが、そのほかは、日本人も含めて誰も訪ねてきていません」
エメルは、ここにいる神野が、岸田が亡くなる前にコンピューター用のメモリースティックを預かったこと、そして、その

ことでエメルら二人の命が狙われることになったことを、あらためて順を追って話した。そして、チャウラが狙われなくて幸いであったと最後に付け加えた。
「分かったわ。あなたたちが狙われているのは、Kishidaが亡くなったことと関係があるということね。できることがあれば、協力するわ」
「ありがとう。Kishidaさんから何か預かった物とかあったら見せていただけないでしょうか？」
「何もありません。彼は普段アンカラに住んでいて、イスタンブールに来るのは、私に会うためだけでした」
やはり、彼らは恋人同士だったのだなと、エメルは思った。
「この間来られたのは、ボスポラス大橋のセレモニーに出られるためでもあったのではなかったですか？ この神野がセレモ

ニーの会場で岸田さんを見かけたような気がすると言っているのですが」
「分かりません。ただ、今回はいつもより長く居る予定で来ていました」
「橋の現場に行かれる前に、彼が何か置いて行かれたものとかありませんか？」
「ありません」と応えてから、チャウラは何か思いついたように、
「そういえば、亡くなる前の日に、彼が出かけた後にメールが来て、メールの最後に何かよくわからないものが付いていました」
と言って、チャウラは、携帯電話をいじり始めた。
チャウラが見せてくれたメールには、

「――――、次のナンバーは、たいへん重要なことに関係がある。消さないで保存しておいてくれ。pw：hnkhnk0096」とあった。

神野はアパートから持ってきたパソコンを起動し、インターネットに接続した。接続したインターネットで自身のメールに接続する。メールを開けると、自分が自分に送ったメールがあり、それを開ける。神野は万一の場合を想定して、あの「S-Project」のファイルを自身のメールに送っておいたのだ。

「S-Project」のファイルを開けて、パスワード欄に「hnkhnk0096」と入力した。pdfファイルとおぼしきファイルが開いた。中身は英語の文章が延々と続いていた。すぐには、何のことか分からない。

ファイルの中身は

チャウラにお礼を言い、パスワードのことは誰にも言わないでほしいと言って別れた。二人はコスキュダルのアディノグル教授の家に向かった。今、彼等はいくつかのマスコミで行方不明として報道されているが、それを隠して秘密裡に行動している訳である。むやみに自身のアパートに出入りすることは、それが露見する可能性がある。

アディノグル教授は、イスタンブール工科大学の教授であるが、すでに七十一歳に近く、普段は同じコスキュダルにある研究所で働いている。それもフルタイムではない。したがって、神野たちに無理を承知で匿ってほしいと頼まれれば、受け入れ

てやろうと思ってしまうのであった。それも、すでに何度か命を狙われたと言っているのだ。
家に着いてチャイムを鳴らすと、教授がその巨体を揺らしながらで現れ、心配そうな顔で、
「まあ、入れ。大丈夫か？」と気遣ってくれる。
リビングに案内された後、シャンルウルファまでお金を送ってもらったお礼と、また今日、無理を言ってお世話になることについてのお礼を言った。
「いいよ。わしは、けっこう時間をもてあましているし、人助けになることは、トルコ人としてきちんとやらしてもらうよ。それにすでに乗りかかった船だからな。それより、いったいどうなっているのか話してみてくれ」
教授は本当にいい人だと心から思う神野であった。

神野はアンカラに行った後、シャンルウルファに行くことになった経緯、現地調査に行って事故に会った、しかし、それが故意の事故ではなかったかと不信に思っていること、そして、すべてが、サリエールで知らないうちに預かったメモリースティックに原因があるのではないかと考えていることを話した。

「それでメモリースティックの中身は、どんなものか分かったのか？」

「イスタンブールで、岸田さんの知り合いの女性に会ってきました。彼女が、ファイルを開けるためのパスワードを持っていました。彼女の家で、ファイルが開くのは、確認したのですが、長文の英語のファイルで中身がどういうものかすぐには分かりませんでした」

「そうか、では早速、そのファイルを見てみよう」

教授もここまで話を聞いてきたので、興味がわいてきたのだ。

神野はパソコンを点けて、ファイルをクリックしてパスワードを入れた。先ほどの英語の資料が現れる。今度は、資料を丹念に読んでいく。隣で教授も読んでいる。資料の最初にタイトルがあり、「Contract Agreement」とある。つまりこれは、何かの契約書なのだ。次に「Taisho Shoji Co. Ltd.」と「RSS Co. Ltd.」という会社の名前がある。その後に、契約の詳細が続き、「Scope of Work」とあるが、具体的な記述がなく、「Task Order」を参照するようになっている。詳細はよくわからないが、なにかを輸送するための契約書のようである。その中に「Afghanistan」、「Turkey」、「Syria」という国名が出てきて、何かをアフガニスタンからトルコ経由でシリアに輸送するため

の契約であることがわかる。
しかし、「Task Order」は添付されていなかった。おそらく、詳細が決まった段階でRSS社から大正商事に、発行されるのだろうと、神野は推測した。リスクを伴うような契約では、契約を何段階かに分けることがあるからである。
「RSSというのは、どういう会社なのかな」と教授がつぶやいた。
「分かりませんが、RSSの製品をアフガニスタンからシリアに輸送する仕事を大正商事が請け負ったようです」
「ただの輸送契約書なら、なにも秘密にするようなことはないはずだが、」
「このRSS社というのを調べてみましょう」
ネットに接続して、「RSS」と打ち込むと、「Ronald Security System (RSS)」というのがヒットした。これはアメリカのシン

シナティにある会社で、いろいろな精密機械のメーカーのようである。しかし、その中に、rocket artillery（ロケット砲）や MSDM（小型ミサイル）などの言葉が並んでいる。つまり、この会社は軍事兵器も作っているということが分かる。「軍需産業」と打ち込んで検索すると、軍事企業のリストなどがヒットする。これを見ると、RSS というのは、アメリカの中堅の軍事企業であるらしい。

「RSS というのは、軍事兵器を作っているアメリカの会社です。これは、たいへん危ない話に巻き込まれたということが、容易に想像されますね」と神野が言うと、

「要は、何かの兵器をアフガニスタンからシリアに運ぼうとしているということだな。しかし、そんな危ないことを日本の商社がやるとは思えないがな」

教授は腕を組んで訝しんだ。
これに神野は商社マンらしい思いつきを言った。
「日本の国内には、たいへん多くのアメリカ軍基地があります。数にすると、一三五の基地があり、その面積は、一〇〇〇キロ平方メートル以上にもなり、日本の国土の０．３％にもなるのです。したがって当然、それに関連した仕事は、日本の商社にも大きな収益をもたらしていると言えます。現在、ひとつの基地を別の場所に移設しようという計画が進んでいますが、後押ししているのは、アメリカの軍需産業やそれに関連した仕事をしている日本の商社だとも言われています。意外なところで、アメリカの軍需産業と日本の商社が結びついているともいえます」
「なるほど、日本には、アメリカ軍基地が今でもそんなに多く

残っているのか。それでは、裏でアメリカ軍の関連会社と日本の会社がつながっていても不思議ではないな。その結果として、いくら日本の商事会社と言っても、表に出せない部分があるということか」

「そうです。たとえば、オスプレイという軍需用の輸送機がありますが、これの製造原価は五億円とも言われています。ところが、それを日本政府は百三億円で買っています。つまり、アメリカの兵器製造会社だけでなく、それを仲介している会社にも莫大な利益をもたらしています。今回このことは、こうした彼等のいろいろな結びつきの中で、リスクを冒してもお互いの利益を優先したと言うことができるかもしれません」

「そうだな。しかし、どうしたものかな。大きな組織がいくつも噛んでいるとなると、逃れるのは用意なことではないぞ」

エメルも、二人の会話を聞いていて、
「そんなことに巻き込まれたら、私たち、助かる見込みがないのではないの。この後どうなってしまうのよ」と涙を浮かべている。

教授と神野の二人は、腕を組んでじっと考えた。そして神野が思いついたように、口を開いた。
「そこで、考えるべきは、私にメモリースティックを渡した岸田さんはなぜ私に預けていって、どうしてほしいと思ったのかということではないでしょうか。渡された時に何か言われたのですが、かなりワインがすすんでいて日本語かどうかも分からなかった次第で、申し訳ないのですが、」
「そうだな。それは、つまり彼はこのプロジェクトに反発する

かして何かをやろうとして消されたとすると、このプロジェクトは公にはできない何かが隠されていることになるわけだ。で、彼はそれを暴露しようとしたのではないかな」
教授は、自分の推理を口にした。
「そうですね。私も、その可能性があると思います。暴露することで、このプロジェクトがやろうとしていることを止めさせることができると考えたのではないでしょうか」
神野も教授の推理をさらに進める。
「では、ここで君がこれを持ってマスコミに駆け込んだとして、君の安全が確保されるかどうかだな。問題は、ふたつある。一つ目は、「Task Order」が添付されていないので、具体性がない。いくら軍事産業が関与しているからと言って、単に何かをアフガニスタンからシリアに運ぼうといっているというだけで戦争に

結び付けるようなことにはならない。二つ目は、この契約書には、まだサインがされていない。つまり、契約書としてまだ成立していないということだ。ということは、マスコミがこれを信用して大きく取り上げてくれて、君がマスコミに登場することで安全が担保されるかというと、それは契約書の信ぴょう性に問題があり、そこまで取り上げてくれないどころか相手にもしてくれんだろう」

ヌライ・アディノグルは大学教授ではあるが、大型プロジェクトに携わっているだけあって、契約関係についても詳しい。契約書にサインがないのは、「Task Order」が完全に発行されていないためではないかと教授は考えている。

「岸田さんは、当然、当事者としていろいろなことを知っていたはずなので、うまくやれば彼の目的は達成されて、彼の安全

も確保されたのでしょう。私としては、岸田さんがやろうとしていたことを、フォローして、なおかつ私とエメルの安全を確保するためには、さらに詳細な情報を手に入れるしかないのではないかと思います」

「たしかにそうかもしれないが、君ひとりでやるには、危険すぎるぞ。隠れてこっそり逃げるのが得策なのではないかな」

「そういう手段もありますが、それでは、ずっと行方不明のまま生きていかなければなりません。エメルのためにも、きちんとした人生を歩みたいと思います」と言ってエメルを見る。

「そうよ、私にはイズミールに家族がいます。すでに行方不明になっていることが知らされているはずよ。早くみんなに堂々と会いたいわ。

家族からも隠れて暮らすなんて考えられないわ」

「そうか、そうだな、分かった。わしに少し考えさせてくれ。ひとり手伝ってくれるかもしれない人間がいる」
そう言って、教授はリビングを出て行った。

一時間ほどして、ひとりの男が、教授の家のチャイムを鳴らした。教授がドア開けると、スキンヘッドに口髭の屈強そうな男がリビングに入ってきた。
エメルが、「あっ、」と声を上げた。
入ってきた男も、「おおっ、」と驚きの声を上げる。二人とも見覚えがある様子である。
「なんだ、君らは知合いだったのかね」
教授が二人の顔を見て驚きの表情をする。
入ってきた男は、一週間ほど前にエメルが地下鉄の駅で誰か

に衝突され、線路に落ちる寸前で彼女の体をブロックしてくれた男だったのだ。
教授が男に二人を紹介する。
「ファルーク、先ほど話した健二とエメルだ。健二、ファルーク・カラドガンだ」
エメルは先日のお礼を長々とした。男は笑いながら、
「あの時は無事でよかった。また会えるとは、うれしいかぎりだな」
エメルにそう言って照れたような顔をした。
教授によると、彼は教授の研究所で、教授の共同研究者兼アシスタントをしている機械工学の博士だということである。最近のエンジニアリングの世界では、いろいろな分野の人がひとつの課題に対して共同で研究を進めるというのは、ごく一般的

なことなのである。ただし、ファルーク・カラドガンは、研究者であるが、以前は、トルコ国防省にいたことがあり、海兵隊の現場に所属していたことがあるとのことであった。

教授は再度、今までのことをファルークに説明した。ファルークはそれを黙ってじっと聞いて、最後に、

「で、私に彼のサポートをして、情報を探れということですか？」

と端的に訊いた。

「そうだ、彼らは私の友人で、ひょんなことから命まで狙われている。それから逃れる方法は、連中の情報をつかんで、公にしてプロジェクトを止めることしかないというのが結論なのだ。彼に協力してくれないかね。日本人の彼ひとりでは、トルコで密かに動きまわるのは難しい。こんなことが頼めるのは、君しかいない」

「分かりました、教授、しかし、私も仕事があります。この件は数日間に限定してもらって、その間については、教授から研究所にうまく言っておいてもらえますか」
「分かった。ファルークありがとう」
神野も握手しながら、英語で礼を言った。
「カラドガンさん、面倒なことをお願いして申し訳ありません。私もあなたに協力していただけたら、たいへん助かります。よろしくお願いします」
「ファルークでいいよ」

福田の事務所

神野とカラドガンは、次の日、再びアンカラに向かった。エメルは、教授にお願いして、しばらく教授の家に置いてもらうことにした。一緒にアンカラに行くと言うエメルを、心細いのは分かるが危険すぎると説得して、しぶしぶ納得させた。

二人は、まず福田と彼の部下であるハムゼ・ヤルグジュの動向を探ることから始めることにした。神野は福田のオフィスに再度、忍び込もうかと考えたが、カラドガンは、忍びこんで目標のものが手に入るかどうか分からないし、忍び込んで見つかるかもしれないというリスクは大きすぎると言った。そこで顔

を知られていないカラドガンがオフィスに行ってまず探りを入れてくるということになった。

カラドガンはチャイムを鳴らした後、福田のオフィスのドアを開けて入っていった。ひとりのトルコ人女性がデスクに向かって仕事しているだけであった。

「どんなご要件でしょうか。福田は不在ですが」

「先ほど電話で言ったように、今日の一時に福田さんと約束があり、来たのですが、不在とは、困りました」

カラドガンはいかにも福田の知り合いのように言った。

「すみません、どなたと言われましたか？」

「ファルーク・カラドガンと言います。トルコ運輸省のものです」と適当なことを言う。

「そうですか、しかし、福田さんは昨日から出かけていて、三日間ほど帰ってきません」
「では、ハムゼ・ヤルグジュさんはおられますか？」
「彼も福田さんと一緒に出張に行っています」
「それは困りました。たいへん重要な話をすることになっていたのですから。彼等の出張先を教えてもらえませんか。近くでしたらこちらから行くことにしてもいいのですが」
「それは、福田さんの許可なしに教えられません」
「では、連絡して許可をもらってくれませんか？」と強引に言った。
女性は仕方なく電話をした。そして、トルコ運輸省のカラドガンという人が事務所に来て、本日ミーティングの約束があったこと、重要な話があるのでそちらに行きたいと言っているこ

となどを伝えている。トルコ運輸省と言ったのが効いたのか、女性は福田の電話番号とホテルを教えてくれた。ホテルの場所は、シャンルウルファであった。

神野は自分らが殺されかけた場所にまた行くということに、不思議と奮い立つ高揚感を覚えた。

カラドガンの偵察

二人は同じ日の夕方の便で、シャンルウルファに飛んだ。空港でレンタカーを借りて、旧市街のウルジャーミィ通りに向かう。旧市街は、その通りの東側に開けており、相変わらず細い路地が入りこんでいて、夜になると薄暗く一般人には危険な場所に映る。この前泊まったパラスイペッキ・パラスに部屋をと

った。
　同じホテルのレストランで食事をしながら作戦を立てることにした。ワインとビールで乾杯した後、神野がまずお礼を言う。
「ファルーク、こんなところまで付き合ってもらって本当にありがとう」
「何を言っているんだ、今始まったばかりじゃないか。それよりどうするか決めよう」
「今までのことを思い返してみると、連中が必死になって岸田さんや私を狙ってきたことを考えると、プロジェクトはすでに動き出していると考えられます。つまり、すでに「Task Order」が発行され、そのために福田さんらがシャンルウルファに来ているのではないかと思うのですが、どうでしょうか？」
「そうだな、わしもその可能性は高いと思う。よしっ、ではま

ず福田に電話してわしが会ってくることにしよう」
そう言って、カラドガンはその場から福田に電話した。カラドガンは決断したら即実行に移すタイプの人のようである。そして、自分はトルコ運輸省のもので、福田がやっている輸送プロジェクトについて重要な話があると言った。今、すでにシャンルウルファに着いていることを告げた。すると、福田から明日の朝、市内のオフィスに来てもらえないかと言われ、オフィスの住所を教えられた。

教えられた事務所は、新市街の中ほどにあるシェヒトリック公園の近くのビルの四階にあった。カラドガンは入口で、福田と約束のあるファルーク・カラドガンというものだと告げてオフィスに入っていった。オフィスの中は、いくつかのブースの

ような部屋に仕切られていて、どれほどの広さで、どのくらいの人がいるのか分からない。しばらくして福田と名のる男が現れ、小さな会議室に案内した。テーブルを挟んで向かい合う。

「福田です。以前お会いしたことは、ありますか？」と訊いてくる。カラドガンは、急ごしらえの名刺を差し出しながら、

「私はファルーク・カラドガンと言います。今までに福田さんにお会いしたことはありません。私はトルコ運輸省にいますが、一昨日、情報局から人が来て、大正商事の下で特殊な輸送プロジェクトが行われているようだ。大正商事の福田さんに連絡しておくから、どんなプロジェクトなのか、輸送管轄の部署として押さえてきてもらいたいと言われ、昨日、あなたのアンカラの事務所に伺いました」と言った。

「そうですか、一昨日にトルコ政府から連絡をもらった覚えは

ないですがね」
「何かの連絡ミスでしょうか。午後一時にあなたのオフィスでと聞いていました。至急と言われていたので、三日間も待つわけにもいかず、シャンルウルファまで訪ねてきました」
「しかし、われわれがやっている仕事は、運輸省の方がわざわざ調べに来られるような特殊なプロジェクトでありませんよ」
「そうですか、しかし、私も立場上、一通り聞いていく必要があります。簡単でいいですから説明してもらえませんか？」
福田は渋っていたが簡単な説明をし出した。
現在までにシリアの難民が四百万人もトルコに押し寄せてきて、国際社会からも国境警備を強化するようにプレッシャーがかかっている現状がある。一方で、トルコ政府はシリア関連のことであまりかたくなな態度をとることは周辺国との関係上、賢明

でないと考えたとのことのようである。福田の説明によると、シリア難民は一千万人を超え、国外に流出した難民も六百万人を超えてさらに増加している。こうした状況で国内の難民および難民寸前の困窮している人々へまず支援物資を届けるのが急務である。このプロジェクトは、ある会社から依頼されて、そうした人道支援物資をシリアに運搬することである。

「人道支援物資の輸送であろうが、現在シリアとの国境は閉鎖されています。トルコの国境を越えていくためには事前に申請を出していただかなくてはなりません。いつ運ばれるのですか？」

「明後日に計画しています」

「それは、急な話ですね。急いで手続きをしてください。ところで、そうした輸送物資は、どこに保管されているのでしょう

か？　見せていただけますか？」
カラドガンは、いかにも中央の役人を装い、有無を言わさない雰囲気をつくって言った。
「かまいませんが、今日はあまり時間がありません」
「どんなものか確認するだけですので、時間をとらせません」
さらに強く言った。
「分かりました。では、ヤルグジュというものに案内させましょう」

カラドガンはヤルグジュに案内されて、シャンルウルファの南側の郊外に位置するテクテクダガリミリ公園に沿った広大な乾いた荒野に連れていかれた。そこには、いくつかの仮設テント倉庫が鉄線の柵で囲まれた基地があった。テクテクダガリミ

リ公園はメソポタミア文明の遺跡のあるところであるとヤルグジュが説明する。この一帯は乾いた岩肌になっており、耕作には向かないとも説明してくれる。基地周辺は凹凸のある赤茶けた岩が雨で浸食され、筋状の模様を描いている。道路以外から車で近寄るのは難しいと思われた。

銃をもった警備員が立っているゲートを入る。

ゲートの両横に蒲鉾型の建物が一棟ずつ建っており、ゲートから六、七メートルの道路がまっすぐに延びている。蒲鉾型の建物の前には、それぞれ一〇台ほどの車が停まっている。駐車場から三〇メートルほど奥に行ったところの左側に大型のテント倉庫が三棟並んで建っており、道路を挟んで右側には同じテント倉庫が二棟並んで建っていた。さらに、このテント倉庫の奥にも十の字の道路があり、道路の奥に数棟のテント倉庫が見え

る。ひとつのテントの大きさは、幅一〇メートル、長さ三〇メートルほどであろうか。
ヤルグジュが手前左側の三棟並んだ真ん中のテント倉庫の前に車をつける。人の出入り用の扉を開けて中に入ると、麻袋やダンボールが山のように積まれていた。食料品や衣料であると説明された。カラドガンは、ひとつひとつ中を開けて調べるつもりはなかった。一通り歩いて見回った後、「分かりました」と言って、引上げながら、
「どのようにしてこれを運ばれるのですか？」と訊いた。
「トラックでアクチャカレの国境を超える予定です」
その後、ヤルグジェに市街まで車に乗せてもらい、宿を取っているパラスイペッキ・パラスとは別のホテルの前で降ろしてもらった。

そのころ、福田はカラドガンから渡された名刺の電話番号に電話していた。
「メルハバ（こんにちは）」と女性が電話に出た。
「メルハバ、そちらは、トルコ運輸省のカラドガンさんのオフィスでしょうか？」
「そうですが、彼は今出張中です」
そう応えたのは、アディノグル教授の奥さん、エヴレンであった。

パラスイペッキ・パラスに戻ったカラドガンは、神野と遅い昼食を食べながら、福田からプロジェクトについて説明を受けたこと、その後、ヤルグジュに案内してもらって、支援物資と

称するテント基地を見てきたことを話した。
話を聞いて、神野はカラドガンの行動力の凄さに感服する。
「ファルーク、あなたはすごい人ですね、たった半日でこれだけの情報を掴むことができたとは、私には到底考えられません」と驚きの表情を浮かべる。
「たいしたことじゃないさ、もと海兵隊だからな」
さらりと言ってから、どういう作戦で行くかの話に入った。
「多分、兵器がストックされているとしたら、あの基地の中にあるのは間違いないだろう。しかし、かなり厳重な警備がされていた」
「中身が兵器であることを証明するには、基地に潜入するしかないですね」
「そうだ、決行は今夜にしよう。それまでに必要なものをそろ

えよう」
やはりファルーク・カラドガンは、ただものではないと神野はあらためて思った。
「分かりました。ところで、ヤルグジェが言ったようにトラックで国境を超えるのは可能だと思いますか？」
「現在、基本的に国境ゲートは閉鎖されている。いくら大義のためと言っても執拗に調べられるだろう。兵器を密かに運ぼうとしている連中がそんなリスクは冒さないだろうと思うがな」
「では、どういう方法が考えられますか？」
「夜、ヘリコプターを使うことかな。低空を行けば監視レーダーにひっかからない」
「なるほど、しかし、ヘリコプターでは一回に運べる量が少ないですよね」

「そうだが、兵器を密輸しようとしている連中なら、それなりの大きなヘリコプターを用意するのではないかな。それに、どこまで運ぶかだ。アクチャカレの国境を超えると、その南側はトルコ軍とクルド民族主義の勢力が混在しているが、さらに、トルコと敵対するシリア政府軍の拠点もその中に点在する。もし、武器をシリア政府軍の拠点に運ぼうとしているとしても、彼らの基地からせいぜい七、八〇キロくらいだから、一晩に数回の往復が可能だろう」

「分かりました。それについても今夜探ってみましょう」

深夜の潜入

シャンルウルファから国境の町アクチャカレまでは、E99を南

下する。テクテクダガリミリ公園に向かうには、途中のハッラーンで左折する。ハッラーンからは荒野のローカル道路があるのみで、街灯はない。二人は深夜一時過ぎに、基地の手前一キロほどの暗闇に車を停めた。ここから先は基地まで歩いて中に侵入する。昼間にカラドガンが基地の様子を見てきており、どのあたりから侵入するのがいいか見当をつけていた。

二人は、基地の奥の方のテント倉庫を目指していた。荒れた荒野で足元が悪いが、明かりを見られるわけにはいかない。

基地の周辺にも照明があり、警備のスキをついて鉄線の柵を切ってもぐりこむしかない。二人は照明の届かない暗闇の中で、警備員の様子を探った。昼にカラドガンが入ったテント周辺は、警備が薄いと分かる。

二人は見せかけの支援物資が詰まっていると思われるテント

を目指して走った。一気に鉄線を切ってもぐりこみ、テントの裏側に張り付く。ここまでは警備員に気づかれていないようだ。テントとは言え、密閉した構造になっており、容易に周辺から中に入ることはできない。入口の場所には大きな重機が入るための大型の扉とその扉の片隅に人が出入りするための通常のドアが付いている。カラドガンは、まず昼に案内された支援物資のテントのドアを目指した。このドアには鍵が付けられていないのを、昼来た時に確認していた。テントの中はわずかな照明が付けられており、麻袋などに書かれた文字は確認できた。

実際に支援物資かどうか、麻袋にナイフで切れ込みを入れる。中身が切れ込みから溢れ出る。確かに小麦粉のようである。また積み上げられたダンボールを抜き出し、梱包を開いてみる。中身は衣類であった。他も開いてチェックしたが、同様に食料

品と衣類などであった。この中はすべて見せかけの支援物資で埋まっていると考えてよさそうである。

外の様子を見ながら、テントのドア開け、隣のテントのドアに向かって素早く走る。しかし、ドアには鍵がかかっていた。カラドガンは先端が曲がった二つの細い金物を出し、これを使ってすぐに施錠をはずした。二人はすぐさま中に入る。カラドガンという男は研究所に勤務する研究員ということであったが、実際には何か裏の顔があるのではないかと神野は思わずにはいられなかった。

テントの中は同じように、わずかな照明がついており、格納されている物資は判別することができた。隣のテントとは違い、木製の梱包の品物が並んでいる。ドア近くに立てかけてあった

バール状の鉄棒で梱包の一部をこじ開けて中身が見えるようにした。パイプ状の部品のようである。これがすぐさま兵器であるかどうかは分からない。他の梱包も同じようにこじ開けてみる。すると、そこには明らかに軽機関銃と分かるものが詰め込まれていた。

「ここにあるのは、通常の小型武器と弾薬だな」

いかにも海兵隊にいたことのあるカラドガンである。

「しかし、兵器であることは、明白ですね。証拠の写真を撮っておきましょう」

神野がテントの中に並ぶ梱包の全体像を撮り、さらに梱包をこじ開けた部分の写真を撮った。

「これだけでは、アメリカの兵器産業がリスクを冒してまで密輸しようとしているものとしては貧弱な兵器だな」

「そうですね、一通り写真を撮ったら隣のテントに行きましょう」

二人は、先ほどと同じように、警備の様子を窺いながら、さらに隣のテントに潜入した。ここも同じように木製の梱包が並んでいる。前と同じように梱包をこじ開けて中身を確認する。この梱包の中身は先ほどの通常の小型武器とは少し様子が違う。小型武器と思われるが、多くの電子機器がついており、最新の兵器のようである。

「これは、最新の小型誘導ミサイルの発射装置の一部だな。これはアフガニスタンでアメリカ軍が使った最新の Spike ミサイルではないかな」とカラドガンが言った。

「ファルーク、あなたはよその国の軍事兵器についてもずいぶ

ん詳しいのですね」
やはり、彼には別の顔があるのではないかと神野は思った。
「これに装着する小型ミサイルがあるはずだ。他の梱包をあたってみよう」
さらにいくつかの梱包をこじあけると、先端が赤く塗られたミサイルがあった。
「やはり、ここにあるのはSpikeミサイルだな。これは容易に持ち運びができて、なおかつ弾道を誘導できるので確実に対象をヒットできるしろものだ」
「なるほど、これなら地上戦をやっているシリアで有効な武器なり、同時に高額な利益を生む密輸品になるわけだ」
神野はミサイルの梱包にカメラを向けた。
とその時、内部の照明が一斉に点いた。

「どこのネズミがこんなところで餌をあさっているんだ！」
突然、英語の大声が飛んできた。四、五人の警備員が銃をかまえて二人を狙っている。その警備員の真ん中に、アメリカ人らしき男とアジア人の男がこちらを見ている。
「神野君、君は生きていたのか」
日本語でそのアジア人が言った。
アジア人は、福田であった。
「こんなかたちで再び君と会うことになるとは残念だよ。また、カラドガンさん、やはり、ただの運輸省の人ではなかったようですね」
今度は英語で二人に言った。
「あなたのやっていることは、大正商事のやることでない。な

ぜこんなことを、」
「君らに理解できないことは、世の中にはたくさんあるのだよ」
「福田！　何を訳のわからないことを言っているのだ。こいつらをさっさと縛りあげろ」
アメリカ人らしき男が喚いた。
神野とカラドガンは警備員によって、あっという間に後ろ手に縛られた、とすぐさま、アメリカ人の右拳が神野の顎に飛んできた。神野は抵抗する間もなく床に転がった。今度はカラドガンが腹部にけりを入れられると同時に、顔面に強烈なパンチを受けた。カラドガンも顔面から血を流しながら床に転がる。
「お前らなんのためにここに忍び込んだんだ。写真まで撮ろうとしていたところを見ると、どこかのスパイだな。何で忍び込んだか言ってみろ」

身動きできず床に転がっている神野の腹部にけりを飛ばしてきた。と同時に、カラドガンの顔面にも蹴りを入れた。カラドガンは意識が混濁したようだ。
「Mr. Karlsen（カールセン）、こいつは、例の岸田からメモリースティックを受け取った男です。メモリースティックの中身を確かめに来たのでしょう」
二人がやられるところを黙って見ていた福田がアメリカ人に言った。
「そうか、だがこいつはお前が始末したはずではなかったのか」
「すみません、すでにアタチュルク湖に沈んだはずだったのですが、どういう訳かまだ生きていました」
「福田、お前ら、詰めが甘いのだ。では、こいつは何者なのだ」
カールセンがカラドガンを指さして福田に問い詰める。

「分かりません、昨日、運輸省の人間だと名乗ってこの基地を探りにきた男です」
意識が朦朧としているカラドガンの腹部に蹴りを入れる。
「お前、どこの回し者だ、言ってみろ。言わなきゃ、すぐにあの世にいってもらうぜ」
そう言った後、カールセンが再度、顔面を強打した。瞼が切れて、血が噴き出した。カラドガンの意識が混濁していると見るや、今度は神野に向かって、
「お前は、こいつがどこの誰か知っているよな」
そう言いながら腹部に蹴りを入れた。
「お前らに言う話などない」
かすれた声を出すが、神野は何度も蹴られて内臓がつぶれたような痛みにあえいでいる。

「どちらにしても、もうすぐ死んでもらうが、死ぬ前に、知っていることを話してもらう」
そう言いながら今度は顔面を蹴った。神野も意識が混濁しそうになる。
「このまま蹴り続けたら、すぐに死んでしまいます。少し私に話させてくれませんか」
あまりの仕打ちを見かねた福田が割って入った。
「甘い奴だな、そんなこと言っているから逃げられたのだ」
「とは言っても、このままでは、話そうとしません。少しまかしてください。何とか情報を取ってみます」
「しつこい奴だな。では、三〇分だけだぞ」
警備員と福田を残して、カールセンはテントを出て行った。

「君が殺されるのは、私の本意ではない。君はすでにメモリースティックの中身を見て、実際の現物を確かめに来たのは分かっている。しかし、これに至った経緯には、それなりの理由とバックグラウンドがある。私の話を聞いて納得してくれたら、命を助けることにするが、同意してくれんかね」
福田が日本語で神野に話しかけた。
「私は、すでに二回も命を狙われているのですよ。しかも、あなたにですよ。そんな人間の話をまともに聞けるわけがないでしょう」
「分かっている。しかし、なんの選択の余地もなく殺されるよりは、助かるかもしれない選択肢を選ぶというのもいいと思うがね」
神野が黙っていると、福田は話始めた。

先ほどのアメリカ人は、Mike Karlsenn（マイク・カールセン）といい、RSSの人間でこのプロジェクトを統括する現地エージェントである。そもそもなぜRSSが、兵器をシリアに密輸することになったかであるが、アフガニスタンで政府軍とタリバーンとの内戦が続いていた頃、政府軍を支援するアメリカ政府からの要請を受けて、RSSは地上戦用の兵器をアフガニスタン政府軍に輸出した。しかし、その後戦況は一変して、内戦はタリバーンの優勢で推移し、国土の九〇％以上がタリバーンの支配となってしまい、届いた兵器は行き場所をなくしてしまった。その後アメリカがアフガニスタンから完全に撤退してしまった。RSSとしては輸出した兵器をタリバーンに接収される前に、タリバーンの目の届かない所に隠し、状況を見てどこかに売りさばこ

うと考えた。

こうした状況の中で、RSSはシリア内戦に目を付けた。シリアでは現在、イスラム国（ISIL）が力を失い、実質的にアサド政権、それに対する反政府軍とクルド民族主義勢力が互いに自分の支配地域を拡大しようとする軍事行動を続けている。こうした状況の中でアメリカ政府は、ロシアの支援を受けているアサド政権が化学兵器を使用したことを理由にアサド政権に対抗する勢力の支援をしてきた。しかし、現実には、反政府軍はアルカイダとの連携など雑多な組織であるとともに、アメリカの支援を受けていることにより、イスラエルと反駁してきたシリアでは国民の支持を得ていない。さらにロシアの空爆を受けるなどして、反政府軍の戦況は非常に悪い。こうした状況の中で、RSSは潤沢な資金のあるアサド政府軍に兵器を売ることにした。

しかし、問題はアメリカ政府に知られずに武器が隠してあるアフガニスタン北部の場所からシリアの政府軍の手までどのようにして運ぶかである。もしこの話がアメリカ政府の知るところとなったら、RSSは生き残れないし、大スキャンダルになることは間違いない。このプロジェクトの総責任者であるWilliam Rondon（ウイリアム・ロンドン）は、知り合いの大正商事の福田に話を持ちかけた。まさか日本人が中東の兵器の取引に関わっているとはアメリカ政府でも想像だにしないだろうと考えたからである。福田とロンドンとは、RSSが日本の防衛省に兵器を輸出するときのカウンターパートで、長年のビジネスパートナーであった。この話を聞いたとき福田は日本の商社の範疇ではないと断った。しかし、ロンドンは、長年、福田が兵器の取引に関して政界と防衛省に裏工作をしてきたことを知っていた。

この話を盾にやらなければ、裏工作の話を表ざたすると脅してきた。

仕方なくこの話を福田個人の判断でやることにして、会社には事後に話すことにした。しかし、福田個人でできるわけがなく、中東で広く輸送関連の仕事をしている大東商会の岸田に頼んだ。岸田とはそれまでに何度も中東での輸送プロジェクトをやってきており、気心が知れていた。しかし、今回のプロジェクトは今までと違い、あまりにもリスクが大きい。当然、岸田は断ってくるだろうと思っていたが、あっさり「やりましょう」と言ってくれた。

岸田は彼の中東のコネクションを生かして、大東商会のトルコ事務所には内緒でプロジェクトを進めた。アフガニスタンのヘラートに届いていた兵器は北部のイラン国境付近に隠してあ

った。そこからトルクメニスタンに近い国境を越えてイランに入り、バンダレトルクマンからカスピ海に出て、再度イランに上陸してアルダビールまで運んだ。アルダビールからトルコ国境までは、さらに三〇〇キロほどの陸送が必要であった。この間、何度か国境を越えて輸送したのであるが、兵器であることは露見せず、無事にトルコ国内まで運び込んだのである。これには福田も感謝とともに驚異のコネクションであると驚嘆するほどであった。

ところが、シャンルウルファのテクテクダガリミリ公園の基地に運び込んだ後、岸田は輸送先をアサド政府軍ではなく、クルド人民防衛隊（YPG）にしてほしいと言い出した。それもアサド政府の半値ほどで売れないかとカールセンに言った。カールセンは本社のロンドンに岸田の話を連絡した。すでに、RSSとア

サド政府との間で密約が成立しており、密約が破棄されたらRSSは、アサド政府からの攻撃にさらされることになる。今更そんなことができるわけがないとロンドンは応えた。これに対し、岸田はそれができなかったら今までのことを公表すると脅してきた。こうなるとロンドンはまともな判断ができなくなり、カールセンに岸田を抹殺するように命令した。カールセンはハムゼ・ヤルグジュとともに岸田をイスタンブールの海岸道路まで呼び出し、海岸道路の崖からボスポラス海峡に突き落とした。ハムゼ・ヤルグジュは、表向きは福田の部下になっているが、RSSが福田に送り込んだ、いわばお目付け役であった。

しかし、岸田を抹殺する前に、彼はプロジェクトの証拠の入ったメモリースティックを見知らぬアジア人に渡したのが確認された。その見知らぬアジア人が、なぜか神野だったのである。

福田は神野が同じ会社の人間で、たとえ彼の知るところとなっても彼はそれを公表するようなことはしないとロンドンに言った。しかし、冷静な判断のできなくなっていたロンドンは、神野と神野からさらにメモリースティックを受け取ったエメルまで抹殺するように命じたのである。

「実際問題、岸田君がいなくなって、このプロジェクトは進めようがなくなっているのだよ」と福田は続けた。

さらに、「このシャンルウルファはトルコ東部でYPGには目と鼻の距離にあるが、実際にアサド政府軍が支配している西部区域までは遠すぎる。私としては、この兵器を処分してこのプロジェクトはなかったことにしたほうがいいと思っている。そこで、この話に協力してくれるのであれば、カールセンの目を盗んで

君と君の友達を逃がしてあげようと思うがどうかね」
神野は、しばらく考えてから、
「私を殺そうとしたあなたの言葉をそのまま信用するわけではないが、話だけは聞きましょう」と応えた。
福田がさらに言葉を続けようとしたとき、カールセンが再びテントに入ってきた。
「福田、何を長々と話しているのだ。こいつらがしゃべらなければ、そのまま死んでもらうだけだ」
再度、神野の顔をめがけてパンチを飛ばそうとした。
とその時、外で他の警備員が何か叫び声を上げた。
「どうしたんだ、」カールセンが警備員に英語で聞いた。
「火事だと叫んでいます」聞かれた警備員が応える。

「一人残ってこいつらを見張っていろ。あとは一緒に来い」
そう言って、一人を残して全員が外に駆け出して行った。

「ファルーク、大丈夫ですか？」
神野は顔を蹴られてひどく血を流しているカラドガンに声をかけた。
「大丈夫だ、それにしても火事とは驚いたな」と倒れたまま応える。
とその時、残っていた警備員が「うっ、」と呻いて倒れた。頭を誰かに角棒で殴られて倒れたのだ。殴った人間は、さらに角棒で殴ろうとした。
「チャウラ、そいつは、もう気を失っているよ。それより、この縄をほどいてくれ」

カラドガンが殴った人間に言った。
それは、岸田の恋人、チャウラ・バヤルであった。
「なぜ、あなたがここに・・・」神野が言いかけたが、
「それより、ここを一刻も早く脱出しなければ、」
チャウラは言いながら、神野の縄もほどいてくれた。火事はチャウラの仕業であることは言うまでもない。

神野らが小火（ぼや）騒ぎに乗じて逃走したことを知ったカールセンは、シンシナティのRSSの本社に電話した。
「マイク・カールセンです。ロンドンさんですか」
「マイク、どうした。そちらは夜中だろう」
「先ほど基地に侵入者がありました。侵入者は、神野健二と仲間ひとりでした」

「それで始末したのだろうな」
「ところが、さらに仲間がいて小火を起こされ、そのすきに逃げられてしまいました。すみません」
「くそっ、お前何をしていたのだ！ どういう状況になったのか分かっているのか。これが公になったら元も子もないのだぞ」
「すみません、分かっています。ただ、神野に仲間がいたとは考えていなかったのですが、何人かの仲間がいるのは明白です」
「どんな奴らなのだ」
「一緒に侵入した奴を縛り上げて吐かせようとしたのですが、途中で逃げられてしまいました」
「まったく、役に立たん奴だな。分かった、今からわしもそちらに飛ぶ。何を仕掛けてくるか分からん。とにかく警備を厳重にしろ、分かったか！」

ロンドンは居ても立っても居られないほどに焦っていた。このRSS の命運を左右するプロジェクトを自分の責任で進めてきたのだ。

「分かりました、ロンドンさん」

ガズィアンテプで

ここは、ガズィアンテプのダビアンホテルの一室。午後の夕日がまぶしく差し込んでいる。ガズィアンテプは、シャンルウルファから0–52を二〇〇キロほど西に走ったところにあるシリア国境に近い町である。この町も古来よりペルシャ、ローマ帝国、オスマントルコの交易の中継地で、さまざまな遺跡がいたるところある。

追手から逃れるために基地を脱出した後、チャウラの車でシャンルウルファを通り過ぎ、このガズィアンテプまで来たのである。その間、カラドガンは顔面に受けた傷で出血が続き、神野は止血のため布切れなどを駆使して介助した。介助の甲斐あってかホテルに着く頃には出血も止まり、話ができるようになっていた。

「健二、君にも迷惑をかけたな。ありがとう」

「それにしても、バヤルさんが深夜に基地潜入して、我々を助け出してくれるとは、思いもかけぬ出来事でした。バヤルさんとファルークはどういう関係なのですか？」

神野は、改めて二人に聞いた。すると、

「君ら日本人には、あまり見分けがつかないかもしれないが、我々はクルドなのだよ」

カラドガンは思いもよらないことを話始めた。
「私もこのチャウラも、クルディスタン労働者党（PKK）の一員なのだ。PKKは、クルド独立を目的につくられた」
それを聞いて、
「えっ、あなたたちが、」
驚くと同時に彼らがテロリストだとの思いが頭の中を走る。
「私の知識では、トルコのクルド系政党としては、国民民主主義党（HDP）や民主的諸地域党（BDP）があるが、PKKはテロを行う過激派集団であると聞いています」
神野は商社マンとして赴任地の政治状況を把握しており、テロリストを前にした緊張感を顕わにしてラドガンとチャウラを見る。
これに対し、カラドガンは落ち着いた表情で応えた。

「それは、トルコ政府側からの見方だ。欧米の連中が、勝手に国の国境を引き、我々クルドは国を持つことができなくなった。トルコ人はヨーロッパよりの国是をとって、長年クルドを押し込めようとしてきた。しかし、いくら押し込められようとも独立した国を持つことは、我々の悲願なのだ。」

そう言って、ベッドの壁にゆったりともたれかかった。その姿にテロリストのイメージはない。

神野もトルコに赴任するにあたり、クルドに関しても一通りの情報を集めてきた。

クルド人居住区域は、現在トルコ、イラン、イラク、シリアなどに幅広く分布している。これは、オスマン帝国の分割をめぐって、悪名高い「サイクス・ピコ協定」が一九一六年に、イ

ギリス、フランス、ロシアの間で結ばれたことに起因する。この秘密協定の中身は、次のようなものであった。

・シリア、アナトリア南部、イラクのモスル地区をフランスの勢力範囲とする。

・シリア南部と南メソポタミア（現在のイラクの大半）をイギリスの勢力範囲とする。

・黒海東南沿岸、ボスポラス海峡、ダーダネルス海峡両岸地域をロシア帝国の勢力範囲とする。

つまり、現在のトルコとシリアの国境とイランとイラクの国境は、このヨーロッパの三カ国によって、その地域に居住する人々の意思とは無関係に決められてしまったのである。結果として、トルコ、イラン、イラクの国境の交点に広く居住していたクルドの人々は、自らの国を持つことをヨーロッパの強国の利害に

よって失わされたのであった。その後、一九四六年に当時、南下政策をとっていたソビエト連邦の後押しにより、イランとトルコの国境近くにクルディスタン共和国が樹立された。これは、ソビエト連邦のまったくの傀儡政権で、ソビエト軍がイラン軍の抵抗にあって撤退した後、わずか十一か月で崩壊してしまうのである。

この地域に居住するクルド人は、二千五百万人から三千万人と言われており、国を持たない世界最大の少数民族と言われている。クルド独立をめざす活動は、彼らの悲願として穏健的な活動からテロ行為までさまざまなかたちで行われてきた。その活動も国の対応も、その国によって異なる。トルコには千四百万人ものクルド人が暮らしており、もはや迫害などで押し込めることは不可能な状況にあり、クルド系と言われる国民民主主

義党（HDP）は、トルコ国会で約一〇パーセントの議席を有するまでになっている。

また、イラクでは一九七〇年に、イラクのアバス党政権とクルディスタン民主党との間の協定が成立し、自治地域が設定された。その後、サダム フセイン政権が崩壊し、アメリカの後押しでクルド自治区が拡大した。自治区では、クルディスタン地域政府（KRG）の大統領が選出されている。現在の地域政府大統領は、クルディスタン民主党（KDP）から選出されている。大統領の下には首相のポストがあり、首相は主に行政を担当し、地域政府は外交以外の権限が、イラクの中央政府から与えられている。つまり、イラクの地域政府は独立国家の様相が出てきているのである。

これに対し、イランではイラン革命でパーレビ王政の崩壊に

協力したとして、共和国の最高指導者、ホメイニー師にクルドの自治を要求したが、要求したこと自体を反革命であるとして要求を一蹴された。以後、厳格なイスラム原理主義の下、アメリカと対峙してきたイラン政権の下では、自治を求める声はかき消されてきたのである。しかし、民主化を求める声は海外の後押しもあり、徐々に大きくなってきている。

各国での穏健的な自治への動きがある一方で、イランやトルコからクルド人組織が攻撃されるということが起こっており、地域に住む若いクルド人の間では、トルコやイランのクルド地域も含めて早期に独立すべきだというクルド民族主義（大クルディスタン）の気運が高まっているのである。

「私たちの目標は、イラン、イラク、シリアの独立戦線と協

力して、統一クルディスタンを実現することなの。今回は、シリアの人民防衛隊（YPG）の武器を増強して、シリアでの独立戦線を一気に拡大することなの」とチャウラが言った。YPGは、シリアのクルド民主党（PYD）の軍事部隊である。

「しかし、テロで一般人を攻撃したら、他の人々の反感を買うばかりではないのかね」と神野が意見を言う。

「テロというのは、一方的なトルコ政府の見方よ。これは、独立戦争なのよ。最近のニュースを見たでしょ。イラクやシリアでは、トルコ軍とイラン軍の空爆を受けてたくさんのクルド人が犠牲になったわ。これは単にイラクやシリアのクルド人が自分たちの政権を脅かすのではないかという理由だけでやったのよ」

チャウラは、神野を諭すように言った。

当初 PKK との戦闘は民族弾圧ではないかと欧米諸国から避難されていたが、テロがフランスなどでも起こり、多くの資金がヨーロッパから流れていることが判明したことにより、欧米諸国からも PKK がテロ組織であると考えられるようになった。こうしてトルコ政府に PKK の排除に名目を与えることになり、追い詰められた戦闘員の多くはシリアやイラク北部に追いやられているのが現状である。

しかし、トルコ国内にもこのような PKK の支援者が何人もいるのだなと神野は思った。そして、

「私は武力での闘争は報復の連鎖を生むだけで何も生み出さないと思っている」と応えた。

「君はクルドではないし、戦争の当事者でもない。岸田君はわれわれに賛同してくれたのだ。国を持たないがゆえに、各国で

迫害に会い、アメリカやヨーロッパの都合で敵にされたり、一方的な味方にされたりしてきた歴史に終止符を打つべき時が来た、と言ってくれた」
カラドガンが、もたれていた壁から立ち上がりながら言った。
さらに続けて、
「岸田君ひとりでどうして大量の兵器をアフガニスタンからこのトルコまで運べたと思うかね。それは、われわれクルドの連携があったからだよ。クルドの居住区は、イランの東北部にもあり、アフガニスタン国境を越えて伸びている。「大クルディスタン」の目的のためには、どの居住区においても連携が可能なのだ」
　福田が岸田の中東におけるコネクションに驚嘆したと言っていたが、これはクルド独立戦線が兵器を調達するために岸田の

情報をうまく利用したのだ。表向きは岸田が動いて、RSSや福田を信用させていたが、実際に働いていたのは、クルド人でしかもPKKのコネクションの人々だったのだ。

「では、なぜ岸田さんが殺されるのを防げなかったのですか？彼はあなたたちと一緒に行動してきたのではないのですか」と神野が聞いた。

「岸田君には、すまないことをしてしまった。今、政府は我々を標的にして情報局が動き回っている。われわれとしても、表立って動くことはできない。岸田君が日本の商社の会社員として単なる物資の輸送をしていることにして表面を取り繕ってきた。しかし、岸田君はプロジェクトの責任者として、実際にシリアのYPGまで届けるつもりでRSSと交渉してしまった。われわれも彼が自分でそこまでやるとは思っていなかった。もっと

も、岸田君としても脅迫のつもりはなく、交渉のつもりだったのだが、RSSの反応まで読めなかったのだ」
「だが結果として、恋人を死に追いやってしまった」
神野は、チャウラの方を見て言った。
「だから、私たちは、どうしても彼が命をかけて運んできた武器をシリアに届けなければならないの」
チャウラが神妙な顔をして応える。
「今まで私を助けていただいたことにお礼を申し上げます。しかし、私は岸田さんと違い、あなたたちの闘争に協力するつもりはないし、戦争とは無縁の日本の商社マンです。この件はここまでにして、私は帰らせてもらいます」
神野は、これ以上は二人から距離をおくべきだと思った。
「健二、それは困るのだよ。君はいろいろなことを知りすぎて

しまった。君はRSSから狙われないため、この情報を公表すると言った。これは、単なるスキャンダルではないので、トルコ政府としても具合が悪いはずだし、トルコ政府に情報が入るのは我々の致命傷になる」
「では、事が終わるまで、イスタンブールのアパートでじっとしています。あなたたちの好きなようにしてください。情報を流すことはしません」
「健二、君はすでに巻き込まれているのだよ。われわれの側に立って協力してもらいたい。これは我々の命をかけた戦争なのだ」
「ですから、それは私の本意ではないので、お断りしますと申し上げました」
「君には断れない。エメルはすでにわれわれの手の中にある」

「えっ、今なんて言った！」
思いもしないことを言われ、驚きの声を上げる。
「我々がエメルを預かっているが、君が我々の言うとおりにしてくれたら何もしない」
「くっそ、なんて卑怯な真似を！　では、アディノグル教授も君らの仲間なのか」
「彼は純粋なトルコ人の高名な教授でしかない。彼には何も手出しをしていない」

神野は、すかさず、エメルの携帯電話に電話した。五秒、一〇秒、二〇秒、「出てくれ！」という願いもむなしく、呼び出し音が鳴るばかりで、最後にはメッセージコールにつながってしまった。続いて、アディノグル教授の携帯に電話した。出た。

「教授、神野です」
「おお、健二、あれから連絡がないので心配していた。どうだ、うまくいきそうか？」
「急ぎの用で電話しました。エメルは、エメルはどうしていますか？」
「朝食は一緒に食べたが、わしは今、研究所にいるから、よくはわからないが、家にいるのではないかな」
「すみません。一旦、電話を切ります」
と言って、電話を切り、教授の家に電話した。出た。
「エヴレン、神野です」
「あら、健二、どう？ うまくいっている？ 心配していたのよ」
「すみません。急ぎの用で、エメルに連絡したいのですが、彼女を呼んでいただけますか」

「彼女なら少し前に、カラドガンさんから電話があったと言って出かけたわね」
「えっ、そうですか」落胆して電話を切った。

「どうだね。私たちは、本気なのだよ。」
カラドガンが進み出て大きな体を神野の前に寄せてきた。
「お前ら、エメルに何をした！」
「さっき言ったように何もしていないよ。君が戻るまで別の安全な場所で待ってほしいと頼んだだけだ」
「万一、エメルを傷つけたらお前らを殺す」
神野は興奮してカラドガンに掴みかかろうとした。カラドガンは神野の手を軽く払いながら、
「興奮しても始まらないぞ、われわれに協力してくれるだけで

いいのだ。終わったら君もエメルも開放すると約束する」
「くそっ、お前らの言うことを聞くから、エメルには絶対に手を出すな」
神野は立ち止まったまま、そう言うしかなかった。
「それは保証する。君が協力してくれる限りね。明日の夜、基地を襲撃する。もっとも、われわれも岸田君がやったように、交渉でRSSが受け入れてくれることが一番だったのだが、ここまで来ては無理だ」
「協力しろと言われても、そんなことに私が加担できるわけがないだろう」
「君には、もう少し冷静になってくれ。冷静になってもらわないと元も子もない。それまで部屋でゆっくりしてくれ。チャウラが君の部屋へ案内する。襲撃方法は、また後で連絡する」

神野はチャウラに案内されて、廊下の一番奥の部屋に入った。
「夕食はご自由にして。明日の朝、朝食後にミーティングします」
チャウラが淡々として告げて、出て行こうとする。
「ちょっといいかね。岸田さんは、なぜメモリースティックを私に渡したのだと思う？」
彼女を呼び止めるように、しかも冷静さを装いながら聞いてみた。
「多分、あなたが大正商事の人だと知っていたのだと思う。あの日、康介はRSSの反応が異常に過激だったことで、政府の内部にいる私たちの仲間にサポートをお願いに行ったの。しかし、すでにただならぬ尾行があることに気づいて、とっさに、持っ

ていたメモリースティックを誰かに渡そうとした。しかし、それが誰でもいいわけではない。たまたま同じレストランにいた大正商事の人に渡した。大正商事の人なら中身が何かすぐに分かると思ったのだと思う」

「そうか、偶然私が同じ場所いたということか。大変な災難に会ったものだ。しかし、部外者の私に渡したら、中身を公表される可能性があり、君たちとっては、元も子もないのではないのか」

「康介は自分が殺されて、兵器が結局アサド政府に渡るくらいなら、この計画が公になり、計画が頓挫することを選んだのだと思う。アサド政府はクルドのYPGをかつてのISISと同じように敵視して殲滅しようと躍起になっている」

「ということは、岸田さんは殺されたが、結果としては岸田さ

んの思惑通りに私が動いたということか。でも君たちはそんなことになっては困る。それで、今までファルークが私といっしょに動いてきたというわけだ」
「名推理だわね。明日の朝、ミーティングがあることを忘れないで」そう言って出て行った。

神野は少し冷静さを取り戻し、状況を考えてみた。
—PKKは、テロ集団と言われているが、カラドガンとチャウラの対応を見る限り、むやみに殺戮をするような輩には見えない。このまま神野が抵抗しなければ、エメルは無事でいてくれるのではないか。
—彼らが明日、兵器の基地を襲撃すると言った。問題は、それに協力して、襲撃が成功したとしても、派手な戦闘を行えば、

国境近くでもあり、トルコ軍に露見する可能性が高い。そんなことになったら、ただの民間人であろうが、一緒に殲滅される可能性がある。

――ということは、PKKとしてもなにがしか派手な戦闘は望んでいないということである。

――一方で作戦がうまくいき、兵器がシリアの彼らの仲間に渡すことができたとして、すんなり、神野とエメルを開放してくれるかどうか。これは楽観的すぎると考えるべきだろう。少なくとも、カラドガンとチャウラの身元を知っていること、どんなルートで兵器を密輸したか、どんな兵器をYPGに渡したかなどの情報を知っており、これがトルコ政府に知れるということは、彼らにとって致命的ともいえる。

ここまで考えて、現状では、絶望的としか思えない状況であ

るとの思いに至った。

神野は先ほど途中で切ってしまった、アディノグル教授に電話した。

「教授、神野です。先ほどはすみませんでした」

「おお、健二、何か急な話のようだったな」

「前置きは、長くなるので省略しますが、エメルがファルーク・カラドガンに誘拐された模様なのです」

「なに、それはどういうことだ」

「ファルークは、PKKの一員なのです。ご存知でしたか？」

「ええっ、そんなこと信じられるわけがないだろう。ここ数年、わしの共同研究者として、研究に没頭してきた男だ」

「しかし、現実に、エメルは彼の指図で誘拐されたのですよ」

「すまない。だが、それは本当なのか？　わしはまだ信じられん」
「私は、今彼らと一緒にいます。そして、直接彼からエメルを誘拐したと言われたのです」
「そうか、分かった。しかし、そう言われると彼の前歴はよくわからないところが多いかも分からん。もし、そうなら彼を引きずり込んだのは、私の責任だ。たいへん申し訳ないことをしてしまった」
「教授が彼を誘わなくても、彼らは何らかの形で私に近づいたと思います。謝る必要はないです。現在、私に対して彼らの作戦に協力しろと強要しています。私が協力している間は、エメルには手を出さないと思います。他に選択肢がないので、少なくとも協力しているふりをします」
「そうか、とにかく無事でいてくれよ。私に何かやることがあ

るか」
「ありません。これ以上教授にご迷惑はかけられません。教授も狙われる可能性があります。十分に用心してください」
「分かった。健二、とにかく無事でいてくれ」

神野は、アディノグル教授と電話した後、再度この苦境をどうしたものか考えた。
—PKK の襲撃がうまくいかなかった場合どうなるか。今や RSS はなりふり構わずアサド政府との契約を実行するはずで、そのための障害は抹消しなくてはならない。とすれば、神野らが RSS から狙われ続ける。
—これでは、逃げ続ける以外、今の状況を打破できない。
ここで、神野は、福田が最後に言った言葉を思い出した。彼

は「もはやこのプロジェは、進めようがない状況になっている。兵器を処分して、プロジェクトがなかったものにしたい」と言ったのだ。神野を一度は殺そうとした男で、信用できる相手ではないが、今の彼の立場を考えれば、彼の言葉には納得できるところがある。

神野は思い切って福田に連絡してみようと思った。彼の電話番号はカラドガンがアンカラの事務所で聞いて分かっている。福田の携帯の番号をプッシュした。はたして出るか。

「Hello,「Fukuda」出た。

「福田さん、神野です。今、お話しできますか」

「・・・・・・」

「福田さん、昨夜、あなたはこう言われました。『兵器を処分して、このプロジェクトはなかったものにした方がいい』と。も

し、そのお考えに変わりがないのであれば、それに協力したいと思って電話しました。いかがでしょう」
「神野君、電話くれたのはありがたいが、君が今どんな立場でこの電話をしているか分からないのでは、安易に話はできないね」
神野は、正直に今までの経緯を話した。なぜ基地に侵入したか、そして侵入した仲間と思っていた連中が実はPKKであったこと。PKKは、確実に基地の兵器を狙っていることを手短に伝えた。そして、
「福田さん、私は現在、拘束はされていませんが、PKKの捕虜になっています。私としても生き残る最善の道は、兵器を処分して彼らが私を捕虜にしている理由を除去するしかないと思っているのです」

「分かった、君が正直に今の君の状況を話したと信じよう。で、君の方には何か手がるのかね」
ここで、明日の襲撃のことを話して、福田が裏切れば、PKKもろとも自分の命もない。電話した時点ですでに賭けに出ているのだと考え、思い切って、明日の夜PKKの襲撃があることを伝えた。福田はそれに敏感に反応する。
「そうかっ、それが本当なら、それに合わせてやるしかないな」
神野が考えているのと同じことを口にした。そして、続けて、
「で、具体的にどんな襲撃計画なのだ」
「まだ、聞いていません。分かったら随時お知らせします」
実際にミーティングをやると言われたが、まだ何も行われていないということを説明して、
「ここは、推定できる範囲でこちらの計画を練るしかありませ

ん」
「よし、君を信用することにしよう」
福田はしばらく考えてから、神野に概略の方法を伝えた。神野には反対する理由がない。二人は、さらに詳細について話し合った。

シャンルウルファの基地

次の日の夜、RSSのロンドンが、カールセン、ヤルグジュ、福田らと警備の責任者らを集めて話を始めていた。シンシナティ ― ニューヨーク ― イスタンブール ― シャンルウルファと飛行機を乗り継いで今、この基地に到着したばかりだった。
「カールセン、侵入したのは神野とどんなやつらだったのだ。

小火を出してすきをつくるなど、失敗したときの手はずまで決めてあったということは、素人ではあるまい」
そう言って、カールセンを睨み付けた。
「すみません、わずかなすきに逃げられてしまい、どんな奴らか分かりません」
「まだ何もわからないだと！ 考えられない無能なやつだな。では福田、お前は神野の仲間に心当たりがあるのではないのか」
今度は、福田に詰問する。
「やつは一昨日の昼に運輸省の役人だと言って訪ねてきた男です。その時に彼がくれた名刺に電話してみたのですが、運輸省の彼のオフィスに繋がったのです」
「しかし、運輸省の役人が夜中に基地に忍び込むわけがないだろう。なんと、まぬけな奴らばかりだ！」

殴り倒さんばかりに、カールセンと福田に怒りをぶつけた。ロンドンは自分の中の怒りがさらに火をつけたように怒り狂った。全員が何も言えず黙ったまま突っ立っている。
しばらく全員を罵倒した後、
「くそっ、それでとにかく警備は強化したんだろうな」
警備の責任者のトルコ人に訊く。
「はい、六人から一二人に増やしています。全員に最新式のアサルトライフルをもたせています」
警備の責任者がそう答えのだが、アサルトライフルというのは、RSSの最新モデルなのだ。
「ということは、基地の兵器を今日雇ったばかりの奴らに渡したというのか。売り物をなんだと思っているのだ！　まったく」
またも警備の責任者を散々怒った後、

「とにかく、基地の中を見られてしまったのだ。今度は何を仕掛けてくるかわからん。お前らは早く決められた配置につけ」と命じた。

警備の連中が去った後、ロンドンは福田に向かって言った。

「福田、今後どうやってアサド軍に兵器を運ぶのだ。お前が任せてくれと言って、このプロジェクトは RSS と大正商事との間で契約も成立しているのだぞ。お前は後には引けないのだぞ」

「ビル、この話はあなたと私の個人的なつながりの中で、あなたが無理やり私を引きずり込んだ。しかし、そのプロジェクトの実行をしていた岸田をあなたたちが殺した。もうこれ以上、このプロジェクトを続行するのは、不可能です。私はこのプロジェクトから撤退します」

「馬鹿なことを言うな！ そんなことをしたら、お前が今までやってきた悪行が公になるのだぞ」
「もうかまいません。ビル、これ以上あなたに付き合うのは無理です」
「くそっ、そんなことは絶対許さん！ お前は俺と一連托生なのだ。・・・」
そう言いかけたとき、「パーン」という乾いた音が闇夜の荒野に響いた。

神野はカラドガンの後ろで旧式のライフルを持って暗闇の中にいた。今夜、PKKはこの基地を制圧する。しかし、詳しいことは結局、神野には知らされなかった。とにかく、敵の中にいる福田を生け捕りにして、どんな計画でアサド軍に兵器が渡され

る予定だったのかを訊き出すのが神野の任務であった。つまり、岸田が亡くなって、RSSとアサド軍とのつながりが分からなくなっていたのだ。

PKKは総勢十人ほどで基地を取り囲んでいる。基地にはテント倉庫と事務所の横に警備員が立ち、基地の周辺からの侵入者を警戒するように歩哨についている。また、基地を囲むように照明があり、基地内とその周囲を照らしている。RSSの警備員は、暗闇から狙っているPKKの戦闘員からすれば、恰好のターゲットである。最初に銃声がして、一人の歩哨が倒れた。警備員はどこから撃ってくるか分からない相手に向かってやたらと撃ちまくる。しかし、いくら最新式のアサルトライフルといえど相手が見えなくては如何ともしがたい。一人、二人と倒れていく。

PKKは徐々に暗闇からテント倉庫の端にすり寄る。RSSの警備

員は、今日雇われたばかり連中もおり、十分な訓練がされていない。一連の襲撃にまず逃げ場を探すのが精いっぱいである。それをPKKは暗闇から狙い撃ちにしようとする。とその時、基地の周辺の照明が、荒野の先まで見渡すように光の角度が変わった。カラドガンらもその光に照らされることになった。

「くそっ、照明の角度が変わるとは、」

カラドガンは他の連中にとにかく岩陰に入るよう合図した。合図したと同時にアサルトライフルの速射が、岩陰目がけて飛んできた。一方、基地には外部からの襲撃を予想して、要所、要所に土嚢で防壁をつくっていた。警備員らは、素早くそれらに避難する。そこから警備員らも反撃に出る。最新式の自動小銃は、発射速度が一分間に五五〇‐六〇〇発と高速射撃が可能であり、こうなると、PKK側も迂闊には出られない。

ロンドンらも事務所にあったライフルを手に敵に対峙しようとしていた。蒲鉾型の建物は鋼製の壁になっており、すぐさま敵の弾丸が貫通することはない。

「倉庫の兵器が傷物にならないように、考えて撃ちまくれ」

ロンドンはあくまで彼らの商品を守ることにこだわっている。

福田は両者が打ち合っている間、事務所の窓からライフルで敵を狙っていた。敵の弾丸が壁の鉄板に当たる音が建物中に響く。すぐさま、ガラスの窓が粉々になる。福田は扉を開けて建物前の防壁に滑りこむ。ここから敵に狙いをつけて防戦する。

PKK側は訓練を受けた戦闘員である。いくら防壁から最新ライフルで速射してきても、岩陰を利用しながら匍匐して前進し、

徐々に基地にすり寄っていく。射撃戦は激しさを増していく。しかし、両者とも倉庫に向けての射撃は極力避けている。どちらにとっても、中の兵器を傷つけることは、絶対に避けなければならいのだ。

手前の三列に並んだ倉庫の横の防壁から撃っていたRSSの警備員がやられた。それを見て、カラドガンは、その防壁に向かって走った。続いて神野も走った。二人とも防壁の陰に滑り込む。と同時に反対側の二列に並んだ倉庫の横の防壁から速射が飛んでくる。カラドガンは、それに応射しながら、さらにそこの防壁からテントとテントの間の路地に走り込み、相手との距離を縮める。神野も続いて路地に走り込む。「お前、ここからは俺が先に行くから、ここから俺の援護をしろ」

言われたように、神野は反対側の防壁に向かって撃ちまくった。

一瞬、相手の射撃が止まった瞬間に、カラドガンは、さらにその先のテントとテントの間の路地に走り込んだ。敵もテントの陰にいるので、むやみと撃ってこない。

カラドガンは反対側の防壁の敵との戦闘に夢中になっている。神野は三列に並んだテントとテントの間にいる。つまり、彼の横のテントは偽装用につくられた穀物が入った倉庫である。神野はこの穀物倉庫の扉に向かって走った。同時に、こちらに向かって弾が飛んできた。すかさず扉を開けて中に滑り込む。敵はそれ以上撃ってこない。薄暗い照明の中で、福田が用意しておいた乾燥機用ブロワーを探した。実際にモノを見ていないのですぐには分からない。外の戦闘は激しさを増している。その時、小麦粉の麻袋の前に三台のブロワーを見つけた。すぐさま横に置いてある大きなビニールパイプを麻袋の中に突っ込み、

片方を乾燥機に連結して、ブロワーのスイッチを入れる。瞬く間に、小麦粉がテント中に広がっていく。さらに残りの二台も同じように稼働した。大量の小麦粉が煙のようにテントの中に充満していく。再び扉を開けて外に出ると、元いたテントとテントの間の路地に走り込んだ。カラドガンはまだ同じテントとテントの間から敵に向けて射撃をしていた。神野はさらに元いた防壁まで走り込む。穀物倉庫から早く遠ざからなければならない。

福田は建物の横の防壁から応戦していた。その防壁から、神野が穀物倉庫から出ていくのが見えた。そして、さらに神野が基地の外に出るのを確認してから、穀物倉庫の隅を狙ってライフルを撃った。しかし、何も反応がない。さらに十発以上連射

したが、何も反応がない。弾丸でテントに穴が開き、白い煙のようなものが吹き出してきている。「くそっ、どういうことだ」

焦りと苛立ちにさいなまれながら、さらに連射した。しかし、反応がない。テントの隅に、ブロワー用の燃料が置いてあるはずなのだ。これに引火すれば、巨大な粉塵爆発が起こるはずである。小麦粉や炭鉱の石炭粉などの粉塵が空気中にある一定濃度以上になると、火花などで爆発する。したがって、小麦粉やコーンスターチなどでも指定可燃物に指定されることもあるのである。

「これ以上は時間がない」と思った福田は、防壁の前に停めてあった自分の車に向かって走った。弾丸が肩を貫いた。そのまま地面に倒れ込む。倒れながらも、ドアを開けて車の中に滑り込む。車のエンジンをかけ、バックのまま勢いよく穀物倉庫

に向かって疾走させた。弾が何発も車を貫通する。テントの扉のところで止まり、ドアを開けてテントの扉に手をかけた瞬間、背中に二、三発の弾丸がめり込んだ。倒れ込んだ、しかし、それでも這いずりながら扉の中に入った。中は、小麦粉が充満して一、二メートル先も見えない。もう意識が薄れていきそうである。入った瞬間、薄れた意識の中で、ライターに火を付けた。ライターから出た炎は真っ赤な火だるまとなり、稲妻のように縦横にテントの中を飛び交った。

神野は基地の照明が薄れるほどの距離のところまで戻って、基地を注視していた。すると、車が事務所の方から、バックで穀物倉庫目がけて疾走していくではないか。車はその倉庫の前で止まり、人が車から出た。しかし、ドアのところに倒れ込む。

弾に当たったのだ。しかし、その人間は這いずりながら扉の中に入った。そして、しばらくして、耳が裂けんばかりの音ともに、巨大な炎が立ち上った。炎は隣のテント、さらにその隣のテントをも巻き込んだ。

「福田さん！ あんたは、馬鹿だ」

神野は巨大な炎に向かって叫んでいた。

弾薬が置いてあったと見られるテントまで火がまわり、続けて巨大な爆発が真っ暗な荒野を昼間のような明るさで照らした。

ゲート横の蒲鉾型の事務所では、最初の爆発があった瞬間、ロンドンが、

「な、なんだ、くそっう」と叫ぶ間もなく、

炎の束が建物に押し寄せ、そのうちのいくつかが壊れた窓を貫いた。中にいた連中は炎の風圧で、床に転がった。同時に、部屋の中が押し寄せた炎に包まれた。中で床に転がった連中は、必死の思いで外に転がり出た。

と、その時、次の爆風が彼らに押し寄せた。巨大な炎の風で、ゲートの外まで吹き飛ばされる。あるものは、すでに意識はなく、横たわった体が燃えている。またあるものは、意識はあるものの、全身にまわった炎に転げまわって叫んでいる。ただ、ロンドンは運よく腰に激痛があるものの意識もあり、炎には包まれていなかった。

「くそっ、誰がこんなことを。絶対に見つけ出して殺してやる！」

しかし、そう叫んだ声が荒野を照らす炎の勢いに空しくかき消されていった。

巨大な爆発が手前のテントから起こったとき、チャウラは基地の近くの岩陰にいた。カラドガンから、「合図があるまでここに留まっていろ」と言われていたのだ。爆風が彼女に押し寄せる。必死で地面にへばりついた。頭上を炎の嵐が通過していく。ひと時、地面にへばりついていた後、岩陰から基地の方を覗いた。と、その瞬間、また巨大な炎が上がり、前以上の炎の嵐が押し寄せた。再び地面にへばりつく。炎の嵐が遠ざかるのを待った。全身が焼けると思うほど熱い。そして、必死で暗闇に向かって走った。

チャウラには、何がどうなったのか全く分からない。カラドガンと神野が基地内に潜入したのは岩陰から見えていた。その間もチャウラは事務所方向の敵に向かって発砲し続けていた。

その時、一台の車がテントの方向に疾走し、男がテント倉庫のひとつに入った。入る間もなく、巨大な炎が夜空に舞い上がったのだ。

暗闇に向かって走っているチャウラの足が何かに当たった。そのままつんのめるように前に倒れる。

「チャウラ、大丈夫か」という声が後ろから聞こえた。

声のした方を振り向くと、ライフルをかまえた神野が立っている。

「大丈夫なわけがないでしょ。健二、あなたはどうして」と言いかけて、チャウラは気づいた。

「健二、あなたなの？ こんなことをしたのは」

「そうだ、ただ正確には、私ひとりではない。ここでひとりの

友を亡くしてしまった」
「なぜ、こんなことを。あなたに、私たちの独立戦争を邪魔する権利はないはずよ」
「そうだ、お前らの邪魔をするつもりはない。ただ、お前らがエメルを人質にとって私を強引に引きずり込もうとしたからだ。やむなく、我々二人が生き延びるための方法をとったのだ」
「何を分けわからないことを言っているの。あなたの恋人は人質にとられているのよ」
「チャウラ、どうも今の状況を把握できていないようだ。君は私に銃を向けられて地面に跪いている。そして、君の仲間は全滅して君を助ける者はいない。エメルの居場所を言ってもらおう」
「私はPKKの戦士よ。あなたのような一般人に脅されて簡単に

しゃべると思う？」
「岸田さんは、なぜサリエールのレストランで私にメモリースティックを渡したのだと思う？」と神野は別のことを言った。
「それは前にも言ったでしょ。あなたが知り合いの日本人だったからよ」
「それはそうだが、それだけではなかったのではないかと思っている。あの兵器で大量の殺戮が繰り返されることを阻止したいと思っていたのではないかと思っている」
「そんなことあるわけないでしょ。彼はわたしたちクルドの独立に賛同してくれた同志なのよ」
「クルド独立には、戦争以外ないということはない」
「部外者に説教されるようなPKKの戦士はいないわ」
「分かった。でも、この状況の中で、エメルを人質にとって、

私を強引に仲間に入れる理由はなくなった。エメルの居場所を教えてくれ。頼む。一昨日、助けてくれた君を殺したくはない」
そう言いながら、銃口をチャウラの顔にあてた。
「私を殺したら、居場所が分からなくなるわよ」
「君が言わなくても、おおよその見当はついている。一昨日、この基地を脱出してから時間的に余裕はなかった。おそらく、カラドガンのコスキュダルの居場所だろうと思っている」とあてずっぽうで言った。
「そんな簡単なところに居るはずがないでしょ」
一瞬、戸惑いながら応えるのを、神野は見逃さなかった。
「君はPKKの戦士にしては、正直な人だ。一緒に来てくれ」
銃口をチャウラの頭にあてて神野に従うように促した。
カラドガンが運転して来た車のところまで来たところで、神

野はチャウラのズボンのベルトでチャウラの両手をきつく縛った。両腕を拘束されたチャウラを座席に乗せ、シートベルトで座席に固定した。車には作戦がうまくいかない場合を想定して、いつでも逃げ出せるように、キーはついたままになっていた。車はメルセデスのセダンで中はゆったりと広い。車を起動させ、シャンルウルファの町を目指す。東の空には、すでに朝焼けが始まろうとしている。

シャンルウルファの町の外れのガソリンスタンドの手前で止め、歩いてガソリンスタンドに入っていった。トルコでは、ガソリンスタンドで、コンビニのように食料品や雑貨を売っている。買い物をした後、再びメルセデスを駆って、今度はシャンルウルファの空港を目指した。道中で、「しばらく食料にありつ

けないかもしれないから、少し腹にいれてくれ」と言って、買ってきたクラッカーなどを与えた。
空港の駐車場は、野天で広大な敷地に柵があるのみである。駐車場の自動ゲートを抜け、ゲートから最も遠いスペースに車を止めた。周りには誰も駐車していない。
車の中で、先ほど買ってきた梱包用の紐であらためてチャウラの両腕、両足を縛った。さらに梱包用のガムテープで口を塞ぐように顔に巻き付けた。チャウラは、抵抗したが、「君を殺すことはしない。我慢してくれ」と言って手足の自由が利かないように固縛していった。完全に固縛した後、後ろのトランクを開け、チャウラを抱きかかえて中に入れた。
「チャウラ、申し訳ないが、今君に仲間と連絡してもらうわけにはいかないのだよ。しばらくここで我慢してくれ。きっと助

けが来る」
もがこうとするチャウラに頭を下げてからトランクを閉めた。

救出

神野は、朝一番のフライトを待って、シャンルウルファの空港からイスタンブールに飛んだ。アタチュルク空港においたままになっていたM2クーペを駆ってコスキュダルのアディノグル教授の家に向かった。昨夜の大爆発はいくら荒野の真ん中とはいえ、人目につかないわけはないだろうと、車のラジオのスイッチを入れた。しかし、どのニュースでも、シャンルウルファのことを取り上げていない。これは、トルコ政府あるいはトルコ軍が関与している可能性があるなと神野は思った。

教授の家のチャイムを鳴らした。
「おお、健二、たいへんな目に会ったな。よく無事に帰ってこられたな」
人の目に合わないように、すぐに家の中に入るように促してくれる。シャンルウルファからこちらに来る間に、おおよそのことを電話で伝えていた。
「健二、ファルークはもう死んでしまったのか？　彼は普通の研究者だったのだが、PKKの一員だったとは今でも信じられん」
開口一番、教授はカラドガンのことを言った。
「爆発した倉庫のすぐ近くにいたので、生きてはいないでしょう」
「そうか、ほかのPKKの連中はどうだ」
「ひとりの女性戦闘員を除いて、他のメンバーも基地の中にい

たので、おそらくかなりの人が亡くなったのではないかと思います。亡くなっていなくても、重症を負っている可能性が高いです」
「それでは、結果的にたいへんな犠牲者を出すことになってしまったな。だが、この事件のことをニュースでは報道していない。おそらく政府が管制をしいているのだな」と暗い顔をした。
「今回の事件では大きな犠牲者が出てしまいました。私としても、たいへん辛く思っています。ただ、言い訳になりますが、あの兵器がシリアに入っていたら、今回の何十倍もの人が犠牲になる可能性があります」
「そうだな、君の選択を責めるつもりはないよ」と言ってから、「まだこの事件は終わっていない。エメルを助けねばならない。ファルークの家の場所は分かるが、どうする？」

エメルの話をしてくれた。
「エメルはファルークの家に監禁されていると思っています。ファルークは多分亡くなっていますが、誰か仲間が見張っているはずです。家の様子を覗いながら、今夜、助け出したいと思っています」
「健二、自分ひとりで救出に行くというのか？」
「まだ事件は、ニュースにもなっていません。また生き残った女性戦闘員は、他の仲間に連絡できないようにしてきました。おそらく、エメルを見張っている連中も詳細は分かっていないと思います」
「その女性戦闘員を殺したのではないだろうな？」
教授が、少し、いぶかし気に訊いた。
「そんなこと、私にはできません。エメルを助け出すまで、固

縛して拘束しているだけです。助け出したら、すぐに開放します」
チャウラを固縛して車のトランクに入れて、シャンルウルファの空港に置いてきた経緯を説明した。
「分かった。健二、君はたくましくなったな。昨日から寝ていないだろう。ランチでも食べて少し休め。その後、ファルークの家に案内しよう」
「本当にお世話になります。ありがとうございます」
「なに、すでに同じボートに載っているのだよ」

カラドガンの家は、第一大橋につながる高速道路の北側に広がる小高い丘の中腹にあった。高速道路をはさんで南西方向にコスキュダルの街並みが見下ろせる。このあたりは家が立ち並

んでいるというより、木々の緑の合間に家があると言ってよい。いわば、コスキュダルの町の外れに位置している。教授によると、三階立てのアパートの三階部分の角の部屋だとのことである。案内してきた教授と入口のインターフォンを確認する。確かに三〇五号室に「F. Karadoğan」とあった。教授には、危険な目に会わないように、そのまま帰ってもらった。

アパートの前の道路に車を停めて部屋を監視する。道路には片側に駐車スペースがあり、何台も駐車していた。夕方ではあるがカーテンは閉まっていて、中にエメルが監禁されているのかは分からない。監視しながら、もし部屋にエメルがいるとしたら、どうやって救い出すか考えた。

すでに三時間以上が経過して、空には星が見え、あたりは暗

闇が迫っていた。しかし、窓には明かりは付かない。三時間以上監視している間に、男が三人出て行き、二人が入って行った。その他は中年の女性が何人か出入りし、家族ずれが数組出入りした。監禁している者が男とは限らないが、誰がその当人かは見当もつかない。神野に焦りが出てきた。いっそインターフォンを押して反応を見るかと思った。とその時、カーテンの閉まった部屋のひとつに明かりが点いた。

「やはり、あの部屋にいるのだ」

神野は体全体が高揚してくるのが分かった。

さらに、監視をつづけると部屋の中で人影が動いた。男のようであるが、はっきりは分からない。外を覗っている様子はない。監禁しているにしても、厳重に警戒しているとは見えない。本当に監禁されているのか。外から見ているだけでは実際にど

うなっているのか分からず、いろいろなことが脳裏をよぎる。エメルは無事だろうと自分に言い聞かせるが悪い方向に向いてしまう自分がおり、ますます焦りが増幅してくる。

さらに、三時間が過ぎて、深夜に近づいてきた。道路を通る車も少なく、人通りは全くなくなった。神野は行動を起こした。このアパートには張り出した屋根のある玄関がある。この玄関の屋根から二階の部屋のベランダに乗り移ることができそうである。さらに二階の部屋のベランダから三階の部屋のベランダに上るには、二階の部屋と部屋の仕切りを伝って上がれそうであると見通しを立てていた。

道路からアパートの敷地の中に入った。玄関の前には駐車場があり、一〇台ほどの車が停まっている。玄関に照明が付いて

いるが、外に人通りはなく、見られる可能性はない。神野は、玄関の柱とそれに沿って付けられている排水管を伝わって玄関の屋根によじ登った。後は、考えていたように、玄関の屋根から三階の部屋のベランダまでたどり着いた。ファルークの部屋はアパートの端にあるので、さらにそのベランダを伝わって、ファルークの部屋まで行く。

中からわずかに、何か話声が聞こえる。男の声と思われる。明かりが点いている部屋の陰から、端のガラス窓を軽く「コーン」と叩いた。しばらく待ったが反応がない。再び、今度は、強めに叩いた。カーテンが少し開き、窓を開ける音がする。

「何が当たったのだ」

男が窓から顔を出した。

その瞬間を待っていたように、男の顔を目がけて神野の回し蹴

りが飛んだ。男は部屋の中に後ろ向きに倒れこんだ。
とその時、中で「キャアー、」という女の悲鳴が上がった。
神野はかまわず中に押し入り、蹴った男の胸に膝蹴りを入れた。
男は横に回転してかわす。再度、男の腹を目がけて蹴りを入れようとしたとき、
「やめて！」
女が叫んだ。
振り向くと、エメルがリビングの隅に立っているではないか。
「エメル、無事だったのか。よかった」
すぐにエメルに歩み寄ろうとした。
その瞬間、頭の後ろで、拳銃のハンマーを引く音が聞こえた。
「そのまま動かないでくれ」
背後の声が言い、神野はそのまま両手を上げる。

「マフムト、何をやっているの。彼は、健二よ」
エメルが拳銃を持った男に言う。
「エメル、分かっているよ。我々の上司だからな」
後ろの男が言った。
神野は、両手を上げたままゆっくりと男の方に振り向いた。
「なにっ、マフムト！ なんでお前がここに」
驚きのあまり絶句する。男は、まぎれもない彼の事務所で働いているマフムト・ギュルセルではないか。その彼が、今、拳銃を神野に向けて立っているのだ。神野は何がどうなっているのか混乱する。
エメルもまた混乱しているようである。
「マフムト、健二がなぜ窓から押し入ってきたかは分からないけど、よく話を聞けば分かるはずよ」

「健二、お前がここにいるということは、作戦がうまくいかなかったということだな」
マフムトが「作戦」と言った。
神野は、徐々にどういうことか分かってきた。
「そうか、お前はクルドだったな。ということは、お前もPKKのメンバーだったということか」
「健二、あなた何を言っているの。マフムトは私をここに連れて来てくれて、ガードしてくれているのよ。PKKとか言って何のことよ」
エメルは、さらに混乱している。
「そうだ、ファルークは我々の仲間だ。クルド独立のための作戦を指揮していたはずだ」
神野は、マフムトはやはりカラドガンの仲間だと確信する。

「マフムト、あなたも何を言っているの。ファルークから電話があって、教授の家にいるのは危ない。君の同僚のマフムトが迎えに行くので、しばらく自分の家に隠れていてくれ、と言われたわ。そしたら、本当にあなたが迎えに来てくれて、この家に匿ってくれたわね」
エメルはマフムトに向かって、PKKなどとは関係ないと言ってほしいと懇願するように言った。
「エメル、君には悪かったが、我々の作戦が終了するまで、健二に邪魔をされないよう、君の身柄を押さえさせてもらったのだよ」
マフムトがエメルに向かって語りかけた瞬間、神野の体はスローモーションのように仰向けに倒れる。倒れながら、神野の右足がマフムトの拳銃を持っている手を蹴った。乾いた「パーン、」

という音が出たが、拳銃はマフムトの手からはじき出されていた。床に倒れた瞬間、神野の右足は、さらにマフムトの両足を裏蹴りで払った。一瞬の事だった。

「エメル、大丈夫か？」

「大丈夫よ」

ソファの隅にうずくまりながらエメルが応えた。

マフムトは神野に左腕を後ろに回され、背後から首を絞められて床に跪いている。

「エメル、そこに紐がある。取ってくれ」とキッチンの方を見ながら言った。

マフムトは両手を後ろで縛られ、両足も座った状態で縛られた。

「マフムト、残念ながら、君たちの作戦は失敗に終わった。ファルークはたぶん生きてはいないだろう」と言ったところで、

「ええっ、ファルークが死んだっていうの。いったい全体何があったの！」
悲鳴にも似た声でエメルが叫んだ。
「エメル、少し黙っていてくれ。時間がないんだ」
エメルに言葉を抑えるように言った後、マフムトに向かって、
「君たちの仲間のチャウラが、シャンルウルファの空港の駐車場に駐車している車のトランクの中に閉じ込められている。助けてやってくれ。車はメルセデス。ゲートから一番遠いところに停まっている」
「くそっ、お前がやったのか」
「そうだ、しかしほかに乱暴はしていない。元気にしているはずだ。俺たちが出て行ったら助けてやってくれ」
そう言ってから、エメルに向かって、

「エメル、ここにいては危険だ。早く逃げるぞ」
と言われても、エメルはまだ釈然としない。
「頼むから俺のいうこと聞いてくれ」
縛られたマムフトをじっと見つめているエメルの手を引いてドアから出て行った。

RSS の反撃

ファルークの家からエメルを連れ出して、運転しながら教授に電話した。
「教授、健二です。なんとかエメルを助け出しました」
「おお、健二、それでエメルも君も無事か」
「はい、二人とも怪我はありません。いろいろご迷惑をおかけ

しました。ありがとうございました」
「よかった。待っているから顔を見せてくれ」
神野は、すでに深夜になった街を教授の家に向かって車を走らせた。
チャイムを押すと、すぐに教授と妻のエヴレンが顔を出した。エメルとエヴレンが抱き合って無事を喜んだ。
中に入って、どうやって侵入したか、そして監禁していたのは神野の事務所のマフムトというスタッフだったことを話した。
「では、エメルは無理やり誘拐されたのではなく、その男に騙されて連れていかれたということか」
「そのようです。乱暴されず助かりました」
再度、教授とエヴレンが、本当によかった、と言ってエメルの方を向いて微笑みかけた。神野はそれを見ながら、

「教授、我々がいると、PKKに襲われる可能性があります。教授には、大変ご迷惑をおかけしました。これ以上、私たちのせいで、危険な目に会われることは避けなければなりません。私たちも、しばらく身を隠すことにします。これで失礼して、今後の準備をします」と言って立ち上がった。
「えっ、私たちこれからどうするの」
エメルが不安そうに訊いた。
「後で、詳しく話すが、結果的に過激派集団PKKに狙われることになってしまった。しばらくトルコを離れるしかないと思っている」
「そんなことを突然言われても、私ついていくかどうか決められないわ」
「付いてきてもらわなければ困る。君ひとりを危険なところに

置いて行くわけにはいかない」
「そうだな。それが一番いい方法かもしれんな」
教授も頷いて言ってくれた。
「もう分けわからないわ」
一方、エメルは、まだ承知できないという風である。
教授とエヴレンに再度、お礼を言って、渋るエメルを連れて教授の家を後にした。

まず二人は、近くのエメルの家に行った。ここで、神野はエメルを置いて、シャンルウルファに行った後のことを細かくエメルに話した。ファルークもチャウラもクルド独立を目指すPKKの一員であったこと、殺されたチャウラの恋人の岸田は、PKKの賛同者だったこと、岸田がPKKの要求に従って、RSSに兵器の

売り先の変更を要求したことなどを順序立てて話した。
「結果的に兵器は処分できたが、PKSのメンバーも大多数が犠牲になってしまった。あの爆発が私の差し金だと分かるのは、時間の問題だ。しばらくトルコを離れるしかないのだよ」と言ってから、エメルを見つめて、
「愛しているんだ、エメル、俺と一緒に行ってくれ。君を置いてはいけない」
神野はエメルの手を取って握りしめた。
「分かったわ。健二、私も愛しているわ」
やっと、一週間ぶりに抱き合えることができた。

それから、一時間くらいかけてエメルの旅支度をした。車に積めるだけの荷物を積んだ。トランクがいっぱいになったM2ク

ーペを駆って、第一大橋を渡り、ゴールデンホーン近くの神野のアパートに着いたのは、すでに明け方近くであった。少しでもファルークの家から遠ざかっておきたいと思った。
久しぶりに家に着いた。階段を上がって、ドアを開けると、どっと疲れが出てソファに倒れるように座り込んだ。顔を天井に向けると、この一週間あまりのことが、走馬燈のように思い出される。
「健二、大丈夫？　本当に疲れたでしょう。大変だったわね」
そう言って、エメルが神野の首に両腕を巻き付けた。神野もエメルを抱き寄せると、彼女の唇に唇を重ねていた。
「何があっても離さないよ。エメル」
「うれしい。どこまでもついて行くわ」
二人は久しぶりの抱擁を楽しみながら、唇を重ね合った。そし

て、果てることのなく互いを求め合う。

神野がベッドで目を覚ましたのは昼近くであった。隣で横になっているエメルに、

「そろそろ出かけよう。今日中に国境を越えたい」とエメルを起こした。

「そうね、分かったわ」

エメルは、裸のままバスルームに行った。

神野のアパートには、もともと大した荷物はないが、当面の長旅に必要だろうと思うものをスーツケースひとつに詰めた。

エメルはシャワーをした後、鼻歌を歌いながら化粧をしている。どうも二人でバカンスに行くような気分なのかもしれない。エメルの支度が終わるのを待って、部屋を出てスーツケースを駐

車場に運ぶ。もうここに帰って来ることはないかなと思うと、また万感の思いが胸にこみ上げてくる。
駐車場に降りたところで、二人の男とすれ違った。ひとりは、頭に包帯をしている。神野は、何気なく振り向いた。と、その包帯の男も振り向いた。
「あっ」と、同時に声を発した。
包帯の男は、まぎれもなくRSSのカールセンだった。

神野は、エメルに「走れっ！」と言って、スーツケースを右手に持って車に向かって走った。二人が追ってくる。必死で走って、車を開けるとスーツケースを後の座席に投げ込む。追いついてきて、二人の男が車のドアをたたき割ろうとする。かまわず車を発進させる。後ろから何かを投げつけた。M2クーペは、

悲鳴を上げながら駐車場から表通りに出る。
「あれは何なの？」
エメルは先ほどまでとは打って変わって青ざめている。
「RSSの連中だ」
「ええっ、PKKだけじゃなく、他からも狙われているの？」
エメルは、また頭の中が混乱する。
「そのようだ」
と応えたとき、バックミラーに白いフォードが、すさまじい勢いで追いかけて来るのが見えた。金角湾沿いのドナンマ通りを北に向かって走っている。幸い郊外に向かう道路で渋滞はしていない。神野は後ろを見ながらスピードを上げる。フォードはそれ以上のスピードで追いついてくる。まともに運転していたらすぐに追いつかれてしまう。ハリチ橋の手前の右側の路地に

入る。
石畳の細い道で人通りが多い。こんなところでむやみに乱暴をしないだろうと考えたのが甘かった。フォードは人だかりも無視して突っ込んできた。見る見る迫ってきて、M2クーペの後ろにバンパーをぶつけてきた。神野は空いている道路を見つけながら必死でハンドルを切った。このままでは、人を轢いてしまう。心臓が飛び出んばかりに鳴っている。どこをどう走っているのかも分からない。
とその時、見覚えのある広い道路が見えた。
ハリチオグル通りに出た。ここから少し北に行くと新しいバイパスがあるはずである。フォードは、またバンパーをぶつけにかかる。なんとしたら逃げ切れるか。

フォードの中で、
「どこか人気のないところに追い込め。追いつめて殺してやる」運転しているカールセンに向かってロンドンが言った。ロンドンは兵器を破壊されてしまい、もうRSSに戻ることはできない。それに加え、今回の一連のことがアメリカ政府に知れたらどんな責めを負うかもしれない。神野に対する憎しみは最高潮に達しているのだ。今のロンドンの頭の中には、憎き神野を抹殺することしかない。

ハスダルバイパスに入り、北上する。通行車両がかなり少ない。フォードは、ますますスピードを上げて、M2クーペに並びかける。ロンドンが拳銃をかまえようとする。神野もスピードを上げてこれをかわす。一六〇キロ以上で疾走している二台は、

すぐにバイパスの終点まで来てしまった。
神野は十分に舗装がされていない山道に入っていく。フォードは車体が重く、曲がりくねった上に、アップダウンの多い山道ではスピードが乗らない。M2クーペがフォードを離しにかかる。周りは木々で覆われてまるで人気はない。行き交う車もたまにしかない。フォードとの距離が開いていく。逃げ切れるか、と神野は思った。とその時、見覚えのある道路に出た。二、三週間ほど前に連中に襲われ、その後恐怖にかられて、むやみに車を走らせてたどり着いたところだ。
道幅は今までの山道と比べ各段に広いが、舗装はされていない。神野は少しスピードを落とし、フォードが追いついてくるように仕掛けた。フォードは平らな道路に出て、本来のスピードを取り戻した。

フォードの中で、
「よし、これで奴らを仕留められるぜ」ロンドンが呟いた。
砂利道をフォードは、スピードを上げてM2クーペに並びかける。
「どうだ、お前らこれでおしまいだ」
そう言って、再び拳銃をかまえた。
とその瞬間、M2クーペは、急ブレーキを踏み、砂利の上で回転しながら止まった。
「なんだっ！」
ロンドンが叫んだ瞬間、フォードは空中に投げ出されていた。
工事用の赤色のコーンが道路の端に並んでいたが、一〇〇キロ以上で走っていては、見えたとしても止まれない。まして砂利道である。

この道路は、工事中でここまでしかできていなかったのだ。以前に来たことある者にしか分からない。神野は歩いて道路の端まで行った。土盛りが半分くらいしか進んでおらず、フォードは、三、四メートル下の土砂の中に嵌っていた。軟らかい土砂のおかげで、フォードには大きな損傷はないようである。土砂につかえたドアを押し開けて、ロンドンとカールセンが外に出ようとしている。命には差し支えないようだ。

漂流

神野は、来た山道を引き返す。元のバイパスの入口からE-80の高速道路に入り、西に向かう。E-80を西に三〇〇キロほど行

くと、ブルガリアとの国境にぶつかる。運転しながら、アンカラの村井支店長に電話した。
「Hello、Murai speaking」村井が出た。
「もしもし、神野です。神野健二です」
「なに、神野君？ 君は生きていたのか」
電話の向こうで、びっくりしている村井の顔が浮かぶ。
「すみません。ご心配をおかけしました。どうしても途中で連絡できませんでした。やっと、生きていることを報告できる状況になりました」
神野は淡々として言った。
「我々は、君とエメル・コルテュルクが亡くなったとして、本社にも報告し、君やコルテュルクの家族にも連絡した。今どこにいるのかね」

村井は、まだ信じられない様子である。
「ご迷惑をおかけしました。家族には私から連絡します。また、日本大使館にも後で連絡しておきます。今回のことは、福田さんがアメリカのRSSという兵器産業の依頼を受けたことが発端でした。そして、結果的に、私とエメルはトルコにいることができなくなりました」
何も知らない村井に電話で詳細を説明するのは無理である。
「なに、それはどういうことだ。福田君は、今どうしているのだ」
「亡くなりました。」
「ええっ、それはほんとうか？」
村井は、また仰天した。
「今回のことで、福田さんと大東商会の岸田さんが亡くなりま

した。二人とも、日本人の誇りに満ちた最後でした」
「いったい、どういうことか話してくれ」
「時間に余裕ができましたら、レポートを作ってお送りします。ただ今は時間がありません。会社は、これで退職ということにしてください。退職願も後でお送りします」
「むむっ、ちょっと待て」
「ほかの皆さまにもよろしくお伝えください」
電話で伝えることしかできないことを許してほしい、と言って電話を切った。

M2 クーペは、快調にブルガリア国境に近づいていた。今回のことを振り返ると、ほんの些細なことが、人の運命を大きく変えてしまうことがあるのだと思う。当分、PKK も RSS も神野のこ

とを探し回るだろう。エメルに故郷を捨てろとは言えないし、捨てさせるわけにはいかない。しかし、当分はトルコに近づくわけにはいかない。

まず国境を越えて首都ソフィアを目指そうと思っている。ソフィアは、ヨーロッパ最古の都市のひとつで七千年の歴史があると言われている。

「エメル、ブルガリアからどこに行こうか。君の行きたいところに行こう」

「健二の行ったことのないところに行きましょう。二人に愛があればどこでも歓迎よ」

神野もそうだと思った。

今、シリアやアフリカから難民がヨーロッパに押しかけている。家がなく移動を続ける人は、世界中で、六〇〇〇万人とも

七〇〇〇万人ともいわれている。いわば世界は、漂流する人々で溢れている。我々もその中のひとりだろう。同じように当てのない旅ではあるが、ひとつだけ確かなことは信じ合える人と一緒だということかなと神野は思った。

完